明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

2015
4

ISSN 1340-8917



特集 ■ 青少年の芸術文化活動の拠点づくり

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです

地域づくり　2015-4

CONTENTS

1 巻頭エッセー／選挙と地域づくり　山口祥義（佐賀県知事）

特集 青少年の芸術文化活動の拠点づくり

4 基調論文 青少年の創造性を汲み上げる拠点づくり　加藤種男（公益社団法人企業メセナ協議会専務理事）
8 北海道東川町 「出会いと交流」を理念に写真甲子園　大角　猛
10 青森県弘前市 ファッションが育てる「人」と「夢」　髙橋直美
12 山形県山形市 社会や暮らしの問題、高校生が解決策を提案　樋口雅子
14 福島県いわき市 いわきの風土から生まれた「フラガールズ甲子園」　蛭田光一
16 新潟県佐渡市 「はんが甲子園」で佐渡を活性化　大桃一浩
18 大阪府堺市 全国の中学校美術部の作品が一堂に　青木祐輔
20 京都府京都市 いけばなを通して心の教育を推進　一般財団法人 池坊華道会
22 岡山県倉敷市 大山名人生誕の地で小学生が熱戦　加藤靖之
24 広島県安芸高田市 全国の高校生が〝神楽の祭典〟に集結　戸田邦昭
26 愛媛県松山市 「ことばの力」信じ、心豊かな人間育てる　日野裕士
28 愛媛県四国中央市 新たな書表現、「書道パフォーマンス甲子園」　眞鍋幸雅
30 高知県 「まんがサークル日本一」目指し、高校生が熱闘　中野智太
32 宮崎県日向市 こども落語全国大会で地域を元気に　黒木隆文

レギュラーリポート

34 トピックス 株式会社サイネックス
地域行政情報誌「わが街事典」を発行　塩野　勝
36 地域パンフレット創造セミナー
魅力あるパンフレットづくりをテーマに
37 自治体アンテナショップ報告書を発行
38 地域づくり団体探訪 香川県直島町
香川大学直島地域活性化プロジェクト
島の活性化へ、大学生が古民家カフェを経営
40 センター通信

44 平成26年度地方創生フォーラム
森から始める地域の再生
首長の思い
46 世界遺産を地域から世界へ
真砂充敏（和歌山県田辺市長）

グラビア
2 青少年の芸術文化活動の拠点づくり
41 第19回ふるさとイベント大賞
47 都道府県漫遊　【富山県】
48 手前みそですが…　【山形県米沢市】

表紙　東北有数の桜の名所・展勝地



満開の桜並木を走る観光馬車

悠然と流れる北上川の河畔にある北上展勝地は、東北有数の桜の名所として知られ、青森県弘前市、秋田県仙北市とともに「みちのく三大桜名所」に数えられています。

毎年4月15日から5月6日まで行われる「北上展勝地さくらまつり」は大勢の花見客で賑わい、期間中は、北上川上空を鮮やかな鯉のぼりが泳ぎ、遊覧船が運航されるほか、満開の桜並木を馬車が走ります。

2キロにわたる桜並木のほかにも、展勝地公園内（293ヘクタール）には約150種1万本の桜があるといわれ、4月中旬ごろに咲き始めるソメイヨシノから5月上旬のカスミザクラまで美しさを競います。

豊かな樹木と景観に恵まれた展勝地は、春の桜やツツジから秋の紅葉、冬には北上川に白鳥が飛来し、四季折々の散策を楽しめます。

公園内は、みちのく民俗村、サトウハチロー記念館など見どころが多く、歩けば歩くほどその魅力に気づかされる、北上の観光の拠点となっています。

（表紙写真は桜並木）

（岩手県北上市）

問い合わせ先＝北上市商業観光課
（0197-72-8241）
（写真提供＝北上市商業観光課）

ESSAY

巻頭エッセー

選挙と地域づくり



佐賀県知事 ● 山口祥義

1月11日投票の佐賀県知事選挙で当選し、この職に就いて約3カ月が過ぎようとしています。出馬を決めてから投票日までは、わずか30日間で、地元では「奇跡の30日」などと言われています。政治活動や選挙運動は初めての経験でしたので、ただひたすら愚直に真っ直ぐに訴えていただけなのですが、今、改めて客観的に考えてみると、困難の連続の長い道のりだったように思えます。

多くの皆様の強い要請を受け、私が出馬を決意したのは、昨年12月12日の夜です。その日までの私は、自分が出馬するとは思っておらず、官民交流で派遣された民間人として、ただひたすら地域づくりの現場にいるか、2019ラグビーワールドカップ開催の支援を行っていました。それまでの総務省過疎対策室長などの経験を活かしながら、地域活性化伝道師として農山漁村や中山間地で地域振興や観光振興のお手伝いをしていたのでした。

出馬会見から告示日までの9日間で県内あいさつ回りをしたのですが、当然ですが知名度ゼロの状況に茫然としました。しかし、地域づくりで、まずはスタートすることだと説いていたことを思い出し、先のことは考えず一歩一歩前進することにしました。そして、どのように私を知っていただこうかと考えた時に、思いついたのが地域づくりの考え方でした。自分の思いをしっかりと目の前の方に伝え、仲間を増やして、皆で前に向いてチャレンジしていこう。

12月25日の出陣式では「一つの灯を掲げて、一隅を照らす」安岡正篤先生のお言葉を叫んでいました。自分が発光体になって想いを伝えようとすれば、それに感銘を受けた人がまた発光体となって次の人につなぐ。1人の想いが2人、そして4人、8人、最後は佐賀の満天を輝かせたいと訴えました。すべては人の想い。これが伝わって前に進めるかどうか。私は、人づくりに多くの力を注いできた肥前の人の想いの強さに賭けていたのです。私の事務所に来られる人が、日に日に増えていきました。特に、ネクタイを締めた人というより、近所の「おばさん」が集まってきたように思います。そして、お年寄りから若い人まで、男性も女性も前を向いて一団となっていったように思います。

選挙を終えて、多くの輪の中で聞かれる話「楽しかったね。でも、もったいなか。次は、他のことで集まらんね」。私は、地域づくりを楽しんでいる輪の中にいる錯覚すら感じました。県外の多くの人たちも様々な形で参加しました。そして、そこから多くの交流、集いが生まれ、地域を創っていく、輝かせていく動きが生まれだしています。何かの目標に向けて、人と人が一緒になって頑張る。途中、失敗もあるけれども、皆の連携の力で前へと進む。この意味で、選挙も、地域づくりの一つの手法なのかもしれません。そして、ノーサイドの瞬間から、皆が将来に向けて歩き出しました。

これから佐賀県も地方創生に向けて、頑張っていきます。これから、素晴らしい中山間地、離島、県境の集落などにも、発光体になっていただきたい。むしろ、コミュニティのしっかりしたこうした地域だからこそ、これから輝ける可能性が高い気がします。我が国の大切なものを多く残しているからです。今後、多くの芽が出るように、地域集落が主役の地方創生を、交流を通して実現してまいりたいと考えているところです。

こんな本物が多く息づく、人が輝き、人と人が美しい絆で結ばれているコミュニティが充実した佐賀県に、Iターン Uターン、地域おこし協力隊でも域学連携でも歓迎です。全国の皆さん、佐賀の輪に入って一緒に楽しみませんか。

青少年の芸術文化活動の拠点づくり



次世代のファッション界を担う人材を育成する「ファッション甲子園」。昨年の開会式でステージに並ぶ参加校
● 青森県弘前市（p10-11）



笑顔で撮影する高校生。「写真甲子園」は北海道東川町などを舞台に毎年行われ、昨年 21 回目を迎えた
● 北海道東川町（p 8- 9）



「フラガールズ甲子園」で演舞する高校生ら。オリジナルなフラ文化の確立をめざす大会となっている
● 福島県いわき市（p14-15）



デザイン選手権 2014 優勝校の伊東高等学校城ヶ崎分校。世界一周と雑巾がけを組み合わせた独創性が評価された
● 山形県山形市（p12-13）



全国の中学校美術部の作品展「アートクラブグランプリ in ＳＡＫＡＩ」。中学生の力作が全国から寄せられる
● 大阪府堺市（p18-19）



「はんが甲子園」。優勝チームには文部科学大臣賞と副賞として佐渡の特産、無名異焼の大桶が贈られる
● 新潟県佐渡市（p16-17）



第 11 回全国小学生倉敷王将戦の様子。大山名人生誕の地で子どもたちが毎年、熱戦を繰り広げる

● 岡山県倉敷市（p22-23）



いけばなの公開コンクール「Ikenobo 花の甲子園」。昨年の全国大会の様子

● 京都府京都市（p20-21）



俳句甲子園で優勝し、喜ぶ高校生ら。同甲子園は今や参加チームが 110 を超え、地方予選を開催するまでに規模が拡大している

● 愛媛県松山市（p26-27）



安芸高田市で毎年開催される「神楽の甲子園」。全国の神楽好きの高校生が伝統の舞を披露する

● 広島県安芸高田市（p24-25）



高知の夏の風物詩、「まんが甲子園」。まんがサークル日本一を目指して高校生が熱い闘いを繰り広げる

● 高知県（p30-31）



昨年の書道パフォーマンス甲子園で優勝した愛媛県立三島高校の演技。力強い動きと筆使いが高く評価された

● 愛媛県四国中央市（p28-29）



昨年の「こども落語全国大会」で小学生の部を制した『ほおづき亭ばある』さん（大阪市）はこども落語界きっての実力者だ

● 宮崎県日向市（p32-33）

特集

青少年の芸術文化活動の拠点づくり

青少年の創造性を汲み上げる拠点づくり



公益社団法人企業メセナ協議会専務理事 ● 加藤 種男

芸術文化との出会い

初めて生のオーケストラの演奏に接した時の驚きは、今でも鮮明に覚えている。戦後間もなく生まれた筆者が子どものころ普通に聴く音楽は、ラジオから流れ出る歌謡曲が中心だった。たまたま父がクラシック音楽を愛好しており、手回しの蓄音機によってレコードを聴いていた。当時のレコードは、ごく簡単に割れてしまうし、かびが生えやすく、扱いが極めて厄介なもので、子どもが触れるのは禁じられていた。したがって、ぼくたちは、父の横でかしこまって聴いたものだ。当時のレコードの録音時間は片面わずかに5分程度で、シンフォニーなどは、楽章の途中でも切れるため、何度もレコードを取り換えて聴かなければならなかった。だからチャイコフスキーのバイオリン協奏曲を繰り返し聴くと、その曲がどこで切れて、どこでレコードを取り換えなければならないか、解るようになってくる。

ところが、10代の初めころ、おそらく日本フィルの演奏だったと記憶しているが、前橋汀子さんのバイオリンソロで、このチャイコフスキーが町の公会堂で演奏された。初めて聴いた生のオーケストラだったが、驚いたことにレコードと違って、曲は切れ目なく続いて行くのである。しかも、特にチェロの音などレコードでは明瞭に聞こえなかったものが、一種風の唸りの様に和音を奏でているのが聞こえるではないか。主としてチェロとコントラバスが低音の支えをして、その上に様々な楽器がメロディーを演奏していることが、耳に鮮やかに響いてきた。この感動は忘れ難いものであった。

しかし、一方では筆者はついに絵を描くことを好きになれず、青少年期いつも美術にはコンプレックスを抱いてきた。あのように美しい木々や川があるのに、それをどうして下手な絵に写生しなければならないのか、理解できなかったのである。

すなわち、青少年のための芸術文化活動の拠点をつくり、出来るだけ子供のころから、芸術文化に接することができれば、その後の人生は豊かにもなるが、そうでない場合もあるということだ。

少子高齢化の中で

現代社会には数多くの課題があるが、なかでも

筆者プロフィール

加藤 種男氏
（かとう・たねお）

アサヒグループ芸術文化財団事務局長、横浜市芸術文化振興財団専務理事などを経て、2012年から現職。「アサヒ・アートフェスティバル」等を立案。現在、さいたまトリエンナーレ総合アドバイザーなど。芸術選奨文部科学大臣賞受賞。

大きいのは圧倒的な少子高齢社会の到来であろう。青少年の激減、すなわち、ほとんど子どものいない社会が生まれている。これは特に過疎や限界集落で顕著に見られるが、都市部においてもいよいよ顕在化しつつある。

過疎地においては、豊かな自然と濃密な人間関係が残された宝物であった。しかし、若者が地方から大都会へと流出していく。何とか彼らを引き留め、あるいは一度は都会に出たとしても、また再びこの地へと帰って来てほしい、さらには、外部からの移住でもいい、子育て世代の減少を食い止めたい。これが、地方の切実な願いである。そのために、利便性を追求し、実に様々な開発投資を繰り返してきたが、結局は、ときどきの観光客の浮沈はあったけれども、ついに人口減少、特に子育て世代の減少は食い止め得なかった。



ダンスで理科（NPO 法人「子どもとアーティストの出会い」の活動風景）

最後の頼みは、青少年の芸術文化活動の拠点づくりである。いくつかの地域がある程度の成功を収めている。しかし、まだまだ試行錯誤が続く。青少年にとって本当に意味のあることは何かを考えず、大人の都合だけで施策を進めても、成功は保証されない。何が課題で、何が可能性を開くのか。

芸術文化を子どもに届けるという観点

多くの切実な考え方は、こうだ。できるだけ子どものうちから芸術文化に接する機会を持つことが、子どもたちの未来にとって重要で、地域の魅力づくりにもなる。地方では、どうしても芸術文化に触れる機会が少ないので、これを何とかしたい。つまり、芸術文化へのアクセスが難しい子どもたちに、芸術文化を届けようというのである。

確かに、芸術文化をこれまでのようにハイカルチャーに限定して捉えると、あたかも多くの青少年が芸術文化から疎外されているように見えるかもしれない。しかし、芸術文化の領域をできるだけ拡大し、ファッション、デザイン、ダンス、マンガなどまで含めれば、彼らは本当に、芸術文化から疎外されていると言えるだろうか。レコードしか存在しない時代とは違い、多様なメディアの発達により、子どもたちは毎日自分の愛好する音楽にも様々な映像にも接しており、なぜ改めて青少年のために芸術文化の拠点づくりが必要なのであろうか。彼らは芸術文化から疎外されているのではなく、ハイカルチャーに違和感を持ち、これを彼らの方で拒否しているのではないだろうか。しかも、この傾向は世界的に見られることで、多くの関係者の涙ぐましい努力にもかかわらず、クラシック音楽発生の西欧においてさえ、オーケストラの観客はひたすら高齢化しており、いくつもの楽団が合併などで消滅している。若者が求めている芸術文化は、老人が求めるものとは、全く違ってしまっているのだ。芸術文化を巡る、この世代間断絶がここまであからさまになったのが現代であり、これが、今日の大きな課題なのである。

それでも確かに疎外されている子どもたちが存在する。貧困、育児放棄、虐待などの理由によって、今でもいかなる芸術文化からも疎外されている青少年が存在する。その応接に力を尽くしている人々、団体がいくつも存在する。ＮＰＯ法人の「芸術家と子どもたち（ASIAS）」や「子どもとアーティストの出会い」のような優れた活動がある。海外でも多くの組織があり、例えば、パリにある「文化と多様性財団（Fondation Culture & Diversite）」という企業財団が、芸術教育の機会均等に熱心に取り組んでいる。

しかし、そうした先駆的な事例に共通していることは、青少年を一方的に教えるのではなく、青少年の創造性を引き出すことに努めている点である。例えば、フィンランドのヘルシンキ市が設置している青少年のための芸術文化拠



ヘルシンキの Annantalo アーツ・センター



ひたすら切り刻んで（「Ars Nova」は、彼らの行動をアートととらえている）

な発想を宝物のように汲み取り、それが膨らんでいく手助けをしているのだという。

さらに興味深い事例は、浜松の福祉法人が実施しているもので、クリエイティブ・サポート・レッツの拠点「アルス・ノヴァ」は、その名の通り、新しい芸術を目指しており、知的障害を持つ青少年が通ってくる施設だが、ここでも芸術文化を教えない。施設の子どもたちが、自らやりたいことは何かをじっと待っている。通常は問題行動とされる、彼らの不思議な行動を、個性的で独創的なアートだと定義づけ、ひたすらこれに付き合う。そのことが、子どもたちに存在価値をもたらし、家族を含めた周囲の人々の視点と、関係性を変えていく。

考えてみれば、芸術文化の効用とは、功利的なものではなく、人がいくつになっても自己表現ができ、それが社会的に認められることを保証し、一人一人の存在価値を見出す助けになることにあるのではなかろうか。だとすれば、芸術文化へのアクセスの難しい青少年だけでなく、そもそも芸術文化とは永遠に無縁と思われていた障害を持つ青少年の価値に着目した活動は、芸術文化活動の拠点づくりの本質を示しているのではないか。

点「Annantalo」の音楽担当教師は、子どもたちの作曲活動を支援しているが、作曲の方法を教えることはないという。むしろ、子どもたちの自由

書を巡る二つの動き

このいきさつについて、書を巡る事例で見てみよう。今日でも、書を習う人は少なくなく、また著名な書道展から市民芸術祭まで、書の展示も多い。しかし、関係者を除けば、書の部外者たる一般の人々からは、ほとんど関心を示されないのも事実だ。芸術文化のどの分野でも愛好家とそうでない人々との間には壁がある。しかし、壁が低い場合もあれば、著しく高い場合もある。文字なくしては生活できない現代人にとって、文字を書く芸術が、これほどまでに壁が高く距離が出来てしまった理由は何であろうか。

根本にはもちろん現代人が筆を持って文字を書くことをしなくなったことがある。その上で、二つの要因が働いている。

第一に、書道展に出てくるような専門家や愛好家の書は、そもそも一般の人に読めない。書けないし書かないから読めないのではあるが、それにしても読めない字を鑑賞することは一般に無理であろう。

もうひとつ重要な要因は、たとえ読めたとしても、そこに書かれている内容が、昔の誰かがつくった漢詩や文章、あるいは和歌といったものであって、書を書く筆者自らの作による文章であることがほとんどない、という恐るべき事実によるのではなかろうか。これは絵画と比較すると解りやすい。絵画に模写ということがあるにしても、展覧会に出てくるもののほとんどは、作者自らが描き

たい題材内容を、作者自らが描いているものだ。内容も作者の発明による。ところが書は、しばしば他者の発明した内容を書くのである。内容がいかに崇高であろうとも、他人の発明だけを示す書よりは、たとえ稚拙でも、その人自身の描きたい事柄に人々は共感するのではないか。

こうした現状に対して、颯爽（さっそう）と斬新な提案をしてきたのが、いわゆる書道パフォーマンスである。

昨年（２０１４年）の全国高校書道パフォーマンス選手権大会（書道パフォーマンス甲子園）の優勝校の書を引用しよう。その冒頭には、「立ちはだかる壁／挫折の日々／孤独ねたみ／黒い感情がうずまく」という文章が４行に書かれている。その後いろいろ紆余曲折があって、最後の２行は、「未来を切り開く覚悟／今心の刃を研ぎ澄ます」というものであった（注）。優勝するだけのことはあって、書もなかなか素晴らしいし、普通に読める。しかし何より重要なことは、文章の巧拙はともあれ、自分たちが自ら選んだ文章を自分たちが表現していることである。だから、何よりこれは同世代の共感を呼ぶ。

創造性について考える

青少年に対して、大人たちは教育指導という観点を持つ。あるいは伝統文化については、伝承のための育成という視点が重視される。

しかし、芸術文化活動において何より重要なのは、創造性である。教育育成という観点に立った場合、この創造性を摘み取る方向に働きやすい。芸術文化の練習訓練においては、まず、その分野の規範が示され、先生が手本あるいは見本を示す。そして、それぞれの達成段階に応じた目標が示されるのである。ところが規範、手本、目標の三原則が、創造性を阻害するのである。

だから、全国津々浦々にピアノ教室が出来た時代、多くの子どもたちが一度はピアノを習った経験があり、したがって、この列島には現在実に８００万台に上るピアノが家庭に存在すると言われているのに、その多くがほとんど弾かれることなく死蔵されているのは、この三原則が確立しているからでもある。

逆に、これが十分に成立していない活動には創造性の可能性が高い。ファッションやデザインであり、あるいはサブカルチャーは、規範が打ち破られ、手本が無視され、目標が必ずしも明確でない分、伸び代があるのだ。

もっとも、三原則が確立している分野でも、工夫いかんでは新たな創造の可能性が開ける。その経緯が、書を巡る先の考察から見えてくる。

青少年の持つ創造性を汲み上げる

この観点から、大変興味深い事実が浮かび上がってくる。江戸時代までは、茶や立花は社会的支配層、つまりは概ね男社会の独占物だった。明治維新以降、その独占階級が没落したため、生き残りを「婦女子の情操教育」に見出そうとした。これを機に決定的に、伝統という名のもとに型の絶対的固定化が生まれ、創造性を放棄した。

書、俳句などを含めて、型を熟知した指導者が示す三原則が、多くの芸術文化の世界を席巻する。文字通り月並俳諧に陥っていた俳諧を革新した俳句においてさえも、稀に創造性を発揮するものたちは異端として排除されてきた。さらに不思議なことに、写真、吹奏楽、創作舞踊のような、近代化とともに、あるいはそれ以降に導入、発明されたはずの分野でさえも、分野として確立すると、たちまちに三原則にしがみつき、創造性を喪失していくのである。

そこに、ガールズたちの反乱が起きているのである。ファッション、デザイン、それに文字通りのフラガールズたちはもちろん、先ほど見たように、ついには書の世界も、ガールズによる大革新の可能性が開けて来ている。あるいは、写真の分野を見ても、デジカメの普及もあって、今や若い女性の参入は圧倒的で、彼女たちによってＳＮＳを通して日々交換されている写真の数は、実に膨大な数に及び、しばしば斬新な表現がその中から生まれている。

青少年の芸術文化の拠点づくりでは、こうした青少年の持つ創造性を汲み上げることが出来るか、それとも指導者たちの持つ三原則の伝達に終わるか、ここに成否の鍵がある。

（注）「書道パフォーマンス甲子園実行委員会」のホームページに掲載されている、第７回優勝校「愛媛県立三島高等学校」の作品写真から引用。

青少年の芸術文化活動の拠点づくり

1 北海道東川町

「出会いと交流」を理念に写真甲子園
―全国の高校生が北海道で「撮影の技」競う―



東川町写真の町課写真の町推進室　主任　●大角　猛

◆◆◆写真甲子園の始まり

「写真の町」東川町は、１９８５年に、自治体として初めて「写真の町」を宣言しました。当時（１９８４年）開拓から90年を迎え、東川町２世紀に向けて「全町民が参加し、後世に残し得る町づくり」を模索し、文化による町おこし事業の実施を決意しました。



真剣に撮影する高校生

写真を中心とした様々な町づくりを展開しておりますが、その中でも大きな取り組みとして、高校写真部・サークルの全国大会である『全国高等学校写真選手権大会』（愛称：写真甲子園）を毎年、東川町・美瑛町・上富良野町・東神楽町・旭川市を舞台に開催しています。

写真甲子園は全国の高校写真部・サークルに新しい活動の場の提供と選手同士の交流を目的に１９９４年、東川町開拓１００年、写真の町10年を記念して開始しました。

◆◆◆写真甲子園２０１４の大会概要
全国から５００校超が応募

21回目を迎えた昨年の写真甲子園は、本戦大会への出場枠18校を目指し、前年に続き全国から５００校を超える５２１校から応募をいただきました。

６月に東京で初戦審査会を実施し、全国８ブロックの中から、各ブロックを勝ち抜いた代表18校と海外オープン枠としてタイ王国（チェンマイ）と台湾の高校各１校ずつ、計20校の選手（３名）・監督（１名）を北海道に招き、８月５日から８日まで４日間（初日は開会式と交流会、２日目から３日間が撮影日）の本戦大会を行いました。

本戦大会の撮影は同一条件下で行うため、選手は実行委員会が用意したデジタル機材を使用します。また、宿泊については東川町キトウシ森林公園内のコテージで合宿し、分刻みの過酷なスケジュールの中、東川町・美瑛町・上富良野町・東神楽町・旭川市の中で設定された五つのステージで撮影を行いました。

写真甲子園の最大の特徴は、組写真を３人のチームで作り上げることにあります。写真を選ぶセレクト会議では、当日撮影した膨大な量の写真の中から、わずか８枚を選び出し、その作品を公開審査会で発表します。公開審査会はファースト（撮影日初日）、セカンド（同２日目）、ファイナル（同３日目）の計３回行われ、それぞれの公開審査会ごとにテーマが決められています。

昨年のテーマはファーストが『北海道』（撮影場所：美瑛町北瑛地区周辺・上富良野町里仁地区周辺）、セカンドが『夏』（撮影場所：旭川市旭川駅周辺・東神楽町市街地、旭川空港周辺）、ファイナルが『ときめき』（撮影場所：東川町市街地周辺）となり、それぞれの組写真に対して、写真家の立木義浩氏を審査委員長とする５名の審査委員が採点し、その合計点により優勝ほか各賞が決定します。

◆◆◆雨の中で作品づくりにチャレンジ
愛知県立津島東高校が初優勝

昨年の大会では、撮影日の３日間とも雨となり、屋外撮影のコンディションとしては良くなかった

ものの、雨を利用しての撮影スポットや被写体を探し、作品づくりにチャレンジするなど各学校の工夫が見られました。

例年にも増して、18校54名の選手たちの実力は拮抗し、各校が優勝を目指し、これまで以上の激戦が繰り広げられ、限られた時間の中でたくさんの写真を撮り、3回の公開審査会を経て、写真と触れ合う機会が増え、わずか4日間の大会期間で選手の撮影技術が格段に向上したことがわかりました。

大会初日と大会後に行われた地元住民宅でのホームステイも好評で、選手と地元との距離がよりいっそう近くなり、ホストファミリーは大会期間中、選手の一番身近な応援団として緊張を解きほぐしていました。

昨年は愛知県立津島東高校（4年ぶり2回目の出場）が見事、初優勝を飾りました。詳しい結果は表のとおりです。

立木審査委員長は閉会式での講評で「21回目の今回、初めて海外からの参加もありました。言葉が通じないのでテーマに沿った写真を撮影するのが難しかったと思いますが、3日間で成長が見られました。写真が立派なコミュニケーションのツールになりました」と指摘した上、「大会では勝敗がつきましたが、一方で人同士のつながりも生まれました。今回出会った人たちとの縁をいつまでも大切にしてください。出会いは点ですが、いつか線になり、そして面になります。今後も写真を撮り続けてください」と激励されました。

◆◆◆出会いと交流、最高の思い出づくりを

写真甲子園は、高校写真部・サークルの全国一を競う〝競争〟の場であると同時に、勝敗を超えたもう一つの出口〝出会いと感動〟を体験する場でもあります。

従来のコンテストが結果主義になりがちであったことに比べ、「写真甲子園」ではプロセスの大切さを思い知らされます。「写真の町」東川町に招待され戦い抜く本戦は、同一フィールド、同一時間内、同一機材・同一メディアなど、全てにわたって予断を許さぬ極めてタイトでハードな〝同一条件〟下での勝負になります。

したがって、プロセスを誤ってしまったチームには好結果は約束されません。短期間の中で多数の組写真をつくるには、汗をいとわぬ努力とコミュニケーションのとれたチームワークが求められます。

「写真甲子園」を勝ち抜く合い言葉は「努力＋友情＝勝利」です。そして、達成感を持ち、あきらめずに最善をつくした者同士には、勝敗や敵味方を超えた出会いや交流が生まれます。この出会いと交流、そして最高の思い出づくりこそ、「写真甲子園」が目指す理念であり、高校生たちへの贈り物です。

写真甲子園実行委員会事務局
北海道上川郡東川町東町1丁目19番8号　東川町写真の町課内
（電話0166-82-2111）
URL　http://syakou.jp/

写真甲子園2014の結果

賞名	学校名	ブロック名
優勝	愛知県立津島東高等学校	中部・東海
準優勝	埼玉栄高等学校	関東
優秀賞		
東川町長賞	沖縄県立浦添工業高等学校	九州・沖縄
美瑛町長賞	香川県立坂出高等学校	四国
上富良野町長賞	石巻市立女子高等学校	東北
東神楽町長賞	埼玉県立芸術総合高等学校	関東
旭川市長賞	北海道江別高等学校	北海道
敢闘賞	北海道名寄産業高等学校	北海道
	宮城県泉館山高等学校	東北
	群馬県立藤岡北高等学校	関東
	埼玉県立浦和第一女子高等学校	関東
	中越高等学校	中部・東海
	静岡県立伊東高等学校	中部・東海
	大阪府立成城高等学校	近畿
	帝塚山学院高等学校	近畿
	大阪市立工芸高等学校	近畿
	山口県立新南陽高等学校	中国
	沖縄県立真和志高等学校	九州・沖縄



セレクト会議。撮影した膨大な量の中から公開審査会で発表する写真を選ぶ高校生ら



優勝した愛知県立津島東高校のメンバー

ファッションが育てる「人」と「夢」
―高校生が「憧れの舞台」でデザイン競う―



弘前商工会議所まちそだて課
ファッション甲子園実行委員会事務局
● 髙橋　直美

ファッション甲子園、優勝校はパリに

「全国高等学校ファッションデザイン選手権大会」（ファッション甲子園）は、国内有数の縫製工場が多数集積しているという青森県のファッション産業発展の潜在力に着目し、ファッションを産業・地域の活性化や次世代を担う人材の発掘・育成、生活文化の向上に活かしていこうと平成12年度からスタートしました。全国の高校生が学校単位でファッションデザインを競う、「若者の夢の創造」をねらいとした全国コンテストです。

同一高校の生徒2～3名と顧問教員1～2名がチームを組みデザイン画を作成、1次審査で選出された35チームがデザイン画をもとに衣装を制作します。8月の最終審査会には、全国から選ばれた35チームが青森県弘前市に集まり、チームのうち1人がモデル、1人は作品を紹介する公開ファッションショー形式で行われ、優勝校に副賞として贈られる「パリ派遣・招待」を目指して上位を競います。



右から昨年の大会の優勝・準優勝・3位の各校

瑞々しい感性を発掘
全国から約3500作品が応募

「ファッション甲子園」は、次の目的が達成されるよう取り組んでいます。

①ファッションを創造的にデザインする能力を涵養し、家庭科教育の一層の充実を図る。
②高校生の夢の創造と次世代のファッションを切り拓く新しい人材を育成する。
③より高いレベルで競い合う場を提供する。
④グループで作品を制作することの難しさや楽しさを経験することにより、人間形成を図る。
⑤教師を含め一つのチームとすることで、教師と生徒の対話が生まれ、相互理解が図られる。

高校生を対象にしたファッションコンテストは他にも存在しますが、「瑞々（みずみず）しい感性」をテーマに、固定概念に捉われない自由で独創的な発想によるデザインを求めている点が本大会の最大の特徴です。所属学科を問わず、高校生であれば誰でも応募できるようファッションへの間口を広げてきました。縫製の知識や技術よりも、高校生らしい思い切った発想と、仲間と力を合わせて目標に向かう経験を重視しています。

昨年の第14回大会では、43都道府県151校から3547作品の応募があり、全国的に、またファッション業界においても注目される大会として、ファッション分野での活躍を目指す高校生の「憧れの舞台」となっています。

県主導から地元主体の開催へ

平成12年2月、青森県は文化振興施策の一つとして県民に身近な生活文化である「ファッション」に着目し、全国で初めて「ファッション振興ビジョン」を策定、同年8月にはビジョンのリーディング事業として「高等学校ファッションデザイン選

手権大会」（北東北三県大会）、平成13年度には全国大会として「ファッション甲子園」をスタートさせました。

平成16年度の第4回大会までは県主催により開催されてきましたが、県の財政事情により平成17年度以降の開催が危ぶまれると、ファッション甲子園関係者のみならず、ひとつのことにひたむきに打ち込む全国の高校生の姿に感銘を受けた多くの県民から継続を求める声があがりました。その要望に応えるべく、県は民間活力を導入した実行委員会形式による運営形態を目指して県内各団体に実行委員会への参画を呼びかけ、この結果、当初の開催目的である文化振興施策に、産業振興と地域振興を加える形で、弘前商工会議所、青森県アパレル工業会、青森県、弘前市の4者による負担金拠出により、平成17年4月に「ファッション甲子園実行委員会」を組織、事務局を弘前商工会議所に置き、以降は当実行委員会主催のもと、毎年継続的に開催されてきました。



大会終了後の交流会で審査員の講評を真剣に聞く高校生たち



まちづくり振興事業「ヒロコレ～ひろさきコレクション」の様子

平成22年度には長年の継続開催の実績が認められ、日本ファッション協会主催「日本クリエイション大賞」において「明日を創る若者応援賞」を受賞、そして本年8月には、記念すべき第15回目の大会を迎えます。

◆◆◆ 地域の活性化と人材育成

お城と桜とりんごのまち弘前市は、藩政時代から続く北東北屈指の都市であり、呉服商を中心にファッション産業においても隆盛を誇っていました。現在も縫製工場が多く存在しているなどその名残は見られ、流行に敏感でファッション感度の高い市民が多いと言われています。

当実行委員会では、「ファッション甲子園」を単なる高校生の全国大会で終わらせることなく、地域や産業の活性化につながるようなイベント、セミナー事業にも積極的に取り組んでいます。

なかでも「ヒロコレ～ひろさきコレクション～」は、弘前市内のアパレルショップが集まり、いち押しのコーディネートを紹介するファッションショーや「一日セレクトショップ」を開催する年に一度のイベントで、地元の若者が自主的にワーキンググループを組織して企画・運営を行っています。

昨年の5回目までは首都圏の企業等の協力を得て開催してきましたが、今年2月開催の6回目はモデル・舞台運営・演出などすべて地元の方で運営することができました。参加ショップや来場者数も年々増えてきています。

セレクトショップの販売促進・新規顧客獲得をねらいとした事業であると同時に、モデルやヘアメイク、舞台運営などイベントに携わる者がそれぞれの分野におけるスキルアップを目指す事業でもあると捉えています。

◆◆◆ 若者の夢を後押しするために

「大会に出場して、ファッションの道に進む決心がつきました」。

ファッション甲子園に出場した高校生がアンケートに書いてくれた言葉です。大会を運営する側としてはこのような言葉が何よりもやりがいを感じます。出場した高校生には、たとえファッションの道へ進まなくとも、目標に向かって臆することなく挑戦する「たくましさ」を持ち続けてほしいと思います。

この大会が、自らの新たな可能性を見つけだし、夢に向かって挑戦しようとする若者の背中を押してあげられるような、また、夢を実現させるきっかけとなるような場であり続けること、それが私たちの使命であると感じています。

社会や暮らしの問題、高校生が解決策を提案
―デザインの力で新たな未来生み出す―

東北芸術工科大学
全国高等学校デザイン選手権大会事務局
● 樋口 雅子

◆◆◆ 全国高校デザイン選手権の経緯と目的

山形県と山形市による公設民営方式で設置された全国初の芸術・デザイン系大学として1992年に開学した東北芸術工科大学の存在を全国に発信するため、「全国高等学校デザイン選手権大会」（通称：デザセン）は、県と市との連携事業として94年にスタートしました。

1990年代は、バブル経済の破綻とともに様々な分野での根幹的な見直しが始まった時期で、開学2年目の本学でも、デザイン工学部の教員たちがこれからのデザイン教育について議論を行っていました。「デザセン」はそんな折に、卒業後に人生の大きな転換期を迎える高校生たちが、自らの人生を社会にコミットさせ、どのように人生を豊かに生きるかを考えられるようになってほしいという当時の教員らの熱い思いからグランドデザインされました。以来、高校生を社会の中心に据え、進学や就職のための知識集積型の勉強ではなく、ことの本質に目を向けて自らが提案できる実験的な教育の「場」として、初回から2004年度までは県と市との共同運営で、2005年からは本学単独で実施・運営しています。

◆◆◆ 高校生がチームで提案 芸術とデザインで明日の世界創造

東北芸術工科大学の理念『芸術的創造と人類の良心による新しい世界観の確立』に直結する大会として位置づけた「デザセン」の開催目的は、『明日の社会を見つめ、明日の世界を創造する』をテーマに、芸術とデザインの力で新しい未来や生き方を生み出すことにあります。①既成概念や常識にとらわれずに高校生らしい視点で社会や暮らしの中から問題・課題を発見する②その解決方法を考える③他人に伝わるように分かりやすく提案する―というプロセスを経て、同じ高校に通う2～3名が1チームとなって一つの提案に取り組み、1次（企画書審査）、2次（提案パネル審査）、決勝大会（本学の大講義室で一般市民、県内・隣県の高校生、本学学生、審査員の合計400名を前にした口頭プレゼンテーション）を経て、問題発見力、分析力、発想力、企画・構想力、独創性、表現力、説得力、実現可能性などを競い合います。



400名の観客を前にステージ上でプレゼン。7分間で内容を的確に伝える工夫やチーム力も問われる

◆◆◆ グッドデザイン賞を受賞 毎年900チーム以上が参加

近年では、このようなデザイン思考が認知されつつありますが、開催初期当時は、ポスターや絵画、造形などの表現を競うビジュアルコンテストが主流で、ものごとの「考え方」をデザインするということが、日本の学校教育の中ではまだまだ浸透しておらず、大会主旨に理解を得ることが難しい時代でした。

単なる造形表現ではなく、能動的に社会と向き

合い、様々な人々と接し、問題を発見し、何らかの提案や解決策を考えることがデザイン本来の役割だということを、当時の事務局職員は、年間約50校もの全国の高校を回り、先生方に開催主旨を伝えてきました。現在、多くの高校に応募をいただいているのは、この地道な活動を続けてきた成果です。

さらに転機となったのは、２００６年度に、本大会が内容に独創性があること、社会・文化的な価値を誘発していること、人と人との新しいコミュニケーションの提案をしていることなどが評価され、「グッドデザイン賞 新領域デザイン部門」を受賞したことです。２０１４年度で21回目となりますが、毎年、全国の高等学校より約９００チーム以上の高校生が、授業やクラブ活動の時間にデザセンに取り組み参加する大会に成長しました。



人が幸せになる提案に対し企業が共感、実現したアイデア。左から「レシート日記」「ネガポ辞典」「つづきがないない」



全国から選ばれた出場高校チームと在学生サポートスタッフ。デザセン決勝大会会場となる東北芸術工科大学で

◆◆◆ 社会問題を色濃く反映 商品化された提案も

近年、優勝・準優勝した提案には、高校生の男女が制服を交換して着用する経験を通して、私達のあたりまえを見直す1日『sexchange day』。世界一周した気分になれる「ぞうきんがけ」で子どもの体力低下を解消する『体幹トレーニング・ぞうきんがけ世界一周』。わかりにくい地方議会を「見える化」する『アプリで変える地方自治』などがあります。どれも最近の社会問題が色濃く反映されています。

また過去には、日記帳にレシートを貼るスペースを設け、レシートを貰った時の出来事を書きとめられるように工夫された『レシート日記』（ビーエスエス株式会社）、ネガティブな言葉をポジティブに言い換える『ネガポ辞典』（主婦の友社）、物語の終わりを自分で考える絵本『つづきがないない』（ほおずき書籍）など、実際に商品化されたものもあります。単なる経済成長を目指す提案ではなく、人間がどうすれば幸せになるのかという生き方の質の提案に企業が共感し実現しました。

地球規模から身近な問題までの幅広い提案を求めているため、学校教育の枠を超えた問題発見力や解決力も育まれます。デザインの高校だけに限らず、教育、社会、経済、建築、工業、農業など、多分野の高校から応募があるのもそんな理由からです。また3名1チームで取り組むことで、発想が行き詰まる時期を超えて、発見の喜びやチームで一つのことを成しえた達成感などを共有でき、高校生一人ひとりの実現力や人間力が鍛えられていきます。

◆◆◆ 東北芸術工科大生が大会を運営 広がるデザセン、韓国からも応募

デザセンの決勝大会の審査員には、様々な分野の第一線で活躍する作家、アーティスト、デザイナー、建築家、クリエイターの方々に就任いただき、デザセンで出された多様な提案に対して社会的な意味づけを行います。また大会運営は本学で芸術やデザインを学ぶ在学生たちが毎年行っており、デザセンは高校生のフレッシュなアイデアを披露する場であると同時に、本学の理念に直結する学生たちの学びの場ともなっています。

２０１１～２０１４年度は、国外にも広がりをみせ、韓国の高校生からも応募がありました。２０１５年度は山形県内の中学校でも開催を予定しています。デザセンは今日に至っても開催主旨の有用性を失わず、様々に関わる人々の力で動的にデザインされ続けています。

いわきの風土から生まれた「フラガールズ甲子園」
―オリジナルな文化運動の確立を目指して―

第5回フラガールズ甲子園実行委員会　事務局長　●　蛭田　光一

◆◆◆石炭からレジャー施設へ

福島県浜通りの南部に位置するいわき市は、年間日照時間が東北で最も長く、温暖で過ごしやすい気候は東北のハワイと言われています。1870年代～1950年代（明治初期～昭和30年）くらいまで本州最大の炭鉱であった常磐炭田を有し、大いに栄えていました。しかし、高度経済成長と共にエネルギー革命による石油へのエネルギー転換が始まると、石炭産業は衰退していきました。

時を同じくして14市町村が大合併し、当時日本一の面積を誇るいわき市がここに誕生したのです。いわき市の風土から生まれた「フラガールのふるさといわき」、半世紀にわたり根付いたこの言葉は、石炭からレジャー施設へと変貌を遂げ、活気を失いつつある町を支えたフラガールから始まりました。その想いは昭和から平成へと受け継がれ、多くのフラガールズを輩出し、今日へと続いてきました。

◆◆◆フラガールズ甲子園 次世代担う高校生の大会

フラとは言うまでもなくハワイの文化でありますが、私たちいわき市民にとって、幼い頃から慣れ親しんだ最も身近な異国の文化なのです。「フラガールのふるさと」で育った我々がフラの大会を地元で開催したいという考えは、至極自然なことだったのかもしれません。また、近年では全国各地で「甲子園」と名が付く高校生を対象とした文化や芸術の大会が盛んに開催されていることを踏まえて、高校生を対象にしたフラの競技大会を思い当たったのです。いわき市の歴史・文化・地域特性及び風土の中から生まれた「フラガールのふるさと」の延長線上にあるものとして、全国に発信できる「ここにしかない」オリジナルのフラ文化の確立を目指しています。

フラは手話的要素で自然や愛を表現し、感謝の心を忘れることがありません。高校生には、フラからハワイの歴史・文化を学ぶことによって、自然や愛を表現しながら優しく思いやりに溢れた心を育み、踊りを創作する過程の中で、想像力や表現力を磨き、グループで踊ることで将来へ役立つ社会性を身に付けてほしいと思います。この「フラガールズ甲子園」は、次世代を担う高校生にとって大切な要素を多く含んでおり、学校教育の一環になるようにと考えています。


大会の運営に携わるボランティア高校生

◆◆◆第1回大会、直前に大震災 高校生の熱意で、会場を変更し開催

2011年（平成23年）3月23日にいわき芸術文化交流館アリオスで開催を予定していた第1回フラガールズ甲子園は、その直前に発生した3・11東日本大震災による影響を受け、中止を余儀な

くされました。

当時、震災の爪痕が大きく、放射能問題を抱えた福島県は出口の見えない風評被害を抱えており、いわき市も例外ではありませんでした。大会開催の見通しが立たず、混沌とした日々を過ごす中、一人の高校生の声に背中を押され大きく動き出したのです。

「私たちのフラで被災地を元気にしたい。大会を開催してほしい」。この言葉に胸を打たれました。各方面の協力を頂きながら開催地を東京に移し、秋葉原のアキバ・スクエアにて2011年9月2日に無事開催することが出来ました。震災復興の後押しもあり、大会は大きな反響を呼び、メディアを通して被災地のみならず、全国に元気と勇気と感動を発信できたと思います。被災地を勇気づけたいと願う高校生フラガールズの勇姿は、かつて町を支えた初代フラガールズの姿に重なるものがありました。「復興はいわきから」。今も、この言葉を胸にふるさとの復興を願ってやみません。



笑顔で演舞する高校生ら



2014 フラガールズ甲子園 で最優秀賞に輝き、賞状とトロフィーを掲げる日本芸術高等学園（東京都）の生徒ら

◆◆◆ いわき市で開催、念願かなう 参加校も着実に増加

フラガール文化と共に歩んできたいわき市の素晴らしさを全国に発信するために、2012年（平成24年）4月、念願のいわきの地にて、第2回フラガールズ甲子園参加校の募集を開始しました。

「福島に娘を行かせて大丈夫か?」「いわきは遠い」など立ちはだかる風評被害などの課題を一つ一つクリアしながら、同年8月19日、第2回フラガールズ甲子園は、いわき芸術文化交流館アリオスで開催することが出来ました。参加高校は全国1都4県より15校、計102名の選手が集結し、課題曲であるフラと自由曲のポリネシアンダンスを披露、1500席を埋めた客席からは惜しみない拍手が送られました。

翌年、第2回大会を検証後、フラガールズ甲子園は大きく舵を切ることとなります。「復興という大人の都合になってはいまいか?」。2013年8月24日に開かれた第3回大会は、「高校生の高校生による高校生のための大会」を理念に掲げ、当日の運営もボランティアの高校生が主体となる新たな船出となりました。参加校は1都9県より23校、計161名。昨年8月25日に開催の第4回大会は1都10県より24校、計211名と着実に参加校が増えてきています。年々フラへの関心、そして大会への興味が確実に高まっていることを実感し、今後の発展が大いに期待されます。

◆◆◆ 今後の展望

昨年、この取り組みが評価され、文科省の後援を頂くまでになりました。今後はいずれ野球の甲子園のように全国規模の地方大会が開催されるようなイベントに育て、本場ハワイとの交流を盛んにしていきたいと思います。現在、フラガールズ甲子園に参加した各学校の生徒達は、フラに学び自発的に老人ホームや幼稚園等に慰問活動を行っており、素晴らしいボランティアスピリッツを発揮しています。このことがフラの真髄であると言え、その精神を継承できる環境づくりにも着手していきたいと考えています。

「地域活性化」「イメージアップ」というのは、この事業が表す結果であり、自ずと後から付いてくるものだと思っています。第5回大会という節目を迎え、私達はより一層フラと高校生に向き合い、大会開催に向け日々全力で取り組んでいく所存です。

「はんが甲子園」で佐渡を活性化
―高校生の力作4200点、島の財産に―

はんが甲子園実行委員
NPO法人エス・ネット事務局長
● 大桃 一浩

◆◆◆ 版画の島、専門の美術館も

「佐渡」は、独自の文化と美しい自然環境を兼ね備えた国内最大の豊かな島である。古来より順徳上皇、日蓮をはじめ能楽の祖・世阿弥など文化人が多く流され、江戸から昭和にかけては世界有数の金銀山が国の経済を支えるなど、日本の歴史に大きく関わってきた。



相川町視察クリニック。立教大学観光学部の学生が佐渡観光を診断した

佐渡にはこれらの歴史の中で育まれた「佐渡おけさ」「鬼太鼓」「能楽」等の色々な郷土芸能をはじめとする独自の文化が色濃く残っている。近年これらの伝統的な文化に新たに「版画」が加わった。これは昭和40年代後半から故高橋信一氏が進めた「版画村」運動により島内に版画が定着し、その作品レベルの高さから「版画の島」としての評価が高まってきたためである。昭和59年には活動拠点として「佐渡版画村美術館」が開設され、全国でも稀な版画専門の美術館として島内外の作家の作品を展示している。

◆◆◆ 大学生の〝診断〟がきっかけ 先進地を訪れ、課題探る

平成11年（1999年）、相川町商工会は「ときめき商店街支援事業」の助成を受けた。これは後継者不足、高齢化、人口減少など商店街が直面する問題の解決策を探るもので、まず、全国的に活躍しているアドバイザーの大歳昌彦氏を招き、指導を仰いだ。

同氏の提案で当時国内唯一の観光学部を持っていた立教大学観光学部の学生たちから観光や街づくりに関する診断「相川町視察クリニック」を受けた。その報告書の中で、「佐渡版画村美術館の作品の充実度に驚いたが、全国に向けたアピールが足りない」という指摘を受けた。学生たちが版画を町の宝として〝発掘〟し、再認識させてくれたと言っていい。

これを受けて商工会の若手が中心に頭をひねり、開催を決めたのが、はんが甲子園だった。商店街活性化策を探る中で、若手経営者が大学生の意見を貪欲に求めていく姿勢から「はんが甲子園」が生まれたのである。

また、「はんが甲子園」の開催に当たり、若手経営者は、同様のイベントを実施している先進地である北海道東川町（写真甲子園）、高知県高知市（まんが甲子園）を訪れ、問題点や課題などを探った。

◆◆◆ 第1回大会に向け、電話で応募要請 予想上回る参加校、高い版画のレベル

平成13年3月、第1回全国高等学校版画選手権大会が開催された。第1回の開催にあたり、このイベントをどのように各高校や美術部の学生、指導の先生に周知するかが課題となった。

商工会の若手経営者3名が手分けをして、全国の約6000校の美術部の先生に直接電話を掛けて、参加をお願いした。すると、大きな問題があることが分かった。それは全国の高校約6000校中、美術専門の先生がいるのは大規模校だけで、ほとんどの学校は、非常勤の美術の先生しかいないこと。さらに美術部はあっても版画をやっている学校が極端に少ないことなどである。

しかし、乗りかかった船、手分けをして必死に参加のお願いをしたところ、1回目から予想をはるかに超える出場校の応募があった。また、予選参加校の版画のレベルが想像以上に高く、驚かさ

れた。こうして第1回大会は、手探り状態の中、なんとか無事に開催することができた。

◆◆◆ はんが甲子園の開催方法 本戦は4泊5日

①予選会

1月初めに行われる予選（初戦）に全国から版画を応募してもらう。

・団体戦3名1組
・個人戦、各個人賞を決定

予選に応募のあった学校から全国13校を決定し、それに佐渡選抜の1校を加えた14校を決定する。

②本戦大会

決定した14校が3月下旬の春休みに実際に佐渡を訪れ、取材をし、版画を制作する。学生3名プラス監督の先生1名の4人1組。応援団の来場は自由。

・初日　歓迎会・「テーマの発表」・佐渡の伝統芸能の鑑賞
・2日目　開会式・ボランティアドライバーによる島内取材・版画制作
・3日目　版画制作（相川町体育館特設会場）徹夜で行う学校もある
・4日目　版画制作・提出締め切り18時、19時から慰労会
日本版画協会員による版画論評
・5日目　版画審査・閉会式・審査発表

◆◆◆「版画強豪校」に入学も

今年3月で第15回を迎えた「はんが甲子園」（応募校は32校）。当初、競わせながら、短期間、短時間で美術、芸術作品を創るこのイベントの開催方法には疑問の声もあった。しかし、開催回数を重ねていくうちにその疑問は自然と消えていった。

「はんが甲子園」は、畳3分の2ほどの大きさの版画をわずか4泊5日間で刷り上げるが、本戦大会出場が決定した学校は、練習に練習を重ねて本番に臨んでいる学校も多い。それは野球の甲子園と変わらない光景だという。また、9回目の優勝校の学生の優勝コメントにあったものだが「はんが甲子園」に出場するために、わざわざ「版画強豪校」に入学した子供もいるほどである。また、「はんが甲子園」に出場するために、マイナーであり、部員数も少なかった美術部に仲間を誘い、チームを作り予選を通って参加した学生もいた。



版画を制作する高校生。徹夜作業も当たり前で、3日間で大作を完成させる

◆◆◆ 作品4200点、佐渡の財産に 一生心に残る思い出づくり

第11回大会は予選会も終了し、本戦大会の出場校も決定し、本戦大会を開催する準備をしているなか、東日本大震災が発生した。大会まで2週間しかなく、実行委員会は開催を断念せざるを得なかった。しかし、被災地である東北の学校、学生から、「3年生である自分は来年出場できないので、なんとか開催してほしい」という連絡が来た時、開催中止の発表をすることを躊躇し、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。


真剣に版画制作に取り組む高校生。選手3人のチームワークも鍵となる

第12回大会の優勝校はその年で閉校が決まっている高校だった。優勝校のインタビューの際にそれがわかったのだが、4月から学校はなくなるとのこと。しかし、「この名誉は記録となってずっと残っていく」というコメントを聞いたとき、毎年、色々なストーリーが生まれ、高校生の心にそれぞれ鮮やかな記憶として残っていくのだと感じた。

一昨年、第2回大会（平成14年）の参加者だった女性が、結婚して旦那さんと子どもと一緒に佐渡に遊びに来てくれた。当時18歳だから、11年も経てば、30歳になるのだから結婚も出産も当たり前といえば当たり前なのだが。その女性は、「はんが甲子園」出場後、東京の美術大学に進学し、そこで旦那さんと知り合い、卒業後結婚したという。

相川町商店街や佐渡島内のあちこちには、この15年間に佐渡の財産となった、本戦大会作品200点あまり、予選作品約4000点がある。これらの版画は、各商店の店頭、店内、あちこちに展示されている。旦那さん、子どもとともに佐渡に〝里帰り〟したこの女性が4泊5日、徹夜をして制作した版画は佐渡汽船にあったそうだ。高校生という感受性が強い時期の佐渡の思い出は一生心に残るものである。

全国の中学校美術部の作品が一堂に
―創造性豊かな人材育成へ、「アートの甲子園」―



堺市教育委員会事務局学校教育部学校企画課
指導主事 ● 青木 祐輔

◆◆◆ 人口84万人の政令市

堺市は、大阪府の中心に位置し、面積150平方キロ、人口約84万人を有する政令指定都市です。仁徳天皇陵（大仙）古墳をはじめとする百舌鳥古墳群があり、中世には海外交易の拠点「自由・自治都市」として、わが国の経済、文化の中心地として繁栄してきました。

現在、「子育てのまち・堺」「歴史文化のまち・堺」「匠の技が生きるまち・堺」を掲げ、安心して子どもを生み育てられる環境づくりや、歴史と伝統を礎に新たな文化を創造する新しい時代のまちづくりを進めています。

◆◆◆ 8回目を迎えたアートの甲子園 全国から約4300点の応募

「アートクラブグランプリ in SAKAI」（全国中学校美術部作品展）は、政令市移行を機に堺市子ども教育ゆめ基金により、平成19年から「中学校美術部の全国大会」として開催されています。この作品展は、全国の中学校から優れた作品を募集・展示し、生徒同士が学びあい、交流する場を創出することで、創造性豊かな人材を育成し、全国の美術部活動の活性化と我が国の美術・文化の発展に寄与することを目的に「アートの甲子園」として開催され、平成26年度で8回目を迎えました。

本市では、30年前に「中学校美術部に発表の場を創りたい」という先生たちの思いで、「堺市中学校美術部作品展」が開催されました。これが土台となり、全国大会の開催が実現しました。

平成26年度は、全国から428校、4285点の応募があり、厳正な審査を経て、1月に堺市立東文化会館で入選・入賞作品135点が10日間にわたり展示されました。表彰式には、全国各地から受賞者が集い、交流会も行われました。

◆◆◆ 美術部員が倍増、表現力高まる 交流を通じ、教員の意識も変化

アートクラブグランプリ in SAKAI が開催されるようになり、本市の美術部員の数は688名（平成18年度）から1148名（平成26年度）と約2倍に増えました。また、生徒は、毎年全国の創造性豊かな作品に直接触れることで、新しい表現方法を発見したり、このように描いてみたいという憧れを持ったりしています。受賞者と交流したり作品を鑑賞したりすることを通して、切磋琢磨しながら堺の生徒の意欲や表現力は高まってきています。アートクラブグランプリの前哨戦とも言える「堺市中学校美術部作品展」も年々熱を帯び、中学生の思いが詰まった作品であふれています。

本市の中学校の美術教員は、日々の授業に加えて、堺市中学校美術部作品展やアートクラブグランプリの運営に携わっています。その中で、全国の美術部と交流したり、審査員の先生方と接した



交流会で作品やクラブ活動の紹介をしている様子

りすることで、堺を誇りに思い、全国を意識しながらよりよい指導をめざそうとする意識の変化が見られます。

ある生徒は「顧問の先生は、生徒が大切にしているそれぞれの世界を表現できるように支えてくれる」と言います。教師は単に指導するのではなく、生徒が描きたいテーマを見つけ、どのように表現するのかを生徒が自ら考えられるように支えることが大切であることを、教師と生徒が共に理解しているからこそ発せられた言葉です。自分が決めた道を自分で歩み、完成まで責任をもって仕上げる力強い姿がそこにはあります。

アートクラブグランプリの開催期間中には、学年単位で中学生が訪れ、同年代の作者が何を表現しているかをじっくり味わっている姿を見ることができます。また、近隣の小学校、幼稚園、保育所（園）の子どもたちも訪れます。小学生は、数年後には中学生になる自分を想像しながら鑑賞し、5歳児は、自分の全ての経験や感覚を働かせて、作品を感じ取ろうとします。力を尽くして表現された作品と向かい合う子どもたちの姿に教員は驚かされます。本作品展は、幼児から大人までが一堂に会して、作品を鑑賞する貴重な機会であり、生涯にわたって美術を愛好する子どもを育てる場となっています。



堺市の中学校美術部作品展。アートクラブグランプリの前哨戦として位置づけられている

◆◆◆ 全国の美術部の活性化に貢献 東京などで巡回展を開催

本作品展は、全国の美術部の活性化にも寄与しています。30年前の本市のように、美術部は活動しているが、発表する場がなくて目標をもちにくいという地域は数多くあります。そのような地域の美術部を中心に、「目標ができて生徒の姿が変わった」「本物の作品のすごさをぜひ、うちの地域の生徒や先生たちに見てもらいたい」「アートクラブグランプリ in SAKAI を目標にした美術部の作品展を自分たちの地域でも開催できた」といった声が全国から寄せられています。昨年は、全国各地の方々の協力のもと、東京をはじめ全国8カ所で巡回展を行うことができました。



小学生を対象としたアートクラブグランプリのギャラリーツアー

平成26年度の入選作品のコメントの中には「東京巡回展を見てから、この色の自分の作品では、だめだと思い、ぬりかえたりもして大変でした」と綴られているものがありました。本物に触れることは、子どもたちにとっても大切なことだと改めて感じています。

◆◆◆ はばたけ世界へ！堺から

本作品展は、堺市と全国をつなぎ、それぞれの地域の活性化につながり始めています。一つの地域だけでは実現できないことが、地域と地域が力を合わせ、さらに発展させていくことができます。今後も、全国各地のみなさんの力を借りながら、子どもたちの活躍、交流の場を絶やすことなく作品展を継続・発展させていきたいと考えています。

一つ一つの作品からは、自分を表現する厳しさに身を置いた中学生の姿が目に浮かぶようです。美術を愛する方々だけでなく、より多くの方々に子どもたちの作品を見ていただきたいものです。全国各地のみなさんとともに、子どもたちが発見する喜び、表現する楽しさを味わい、それぞれの世界へはばたく子どもを育成してまいります。

いけばなを通して心の教育を推進
―高校生が挑戦、華道の公開コンクール「花の甲子園」―

一般財団法人　池坊華道会　事業部　学校華道課

◆◆◆事業立ち上げの経緯

いけばなと言われると、畳に正座と堅苦しいイメージを持たれがちです。特に、近年、若い世代の伝統文化離れが著しいという現状があります。そのような中、華道家元池坊では、「学校」という教育の場で、お花を通した心の教育＝学校華道「花育」として様々な事業に取り組んでいます。その一つとして、高校生によるいけばな公開コンクール「Ikenobo花の甲子園」を立ち上げることになりました。

華道部など文化系クラブは、学校の中でもなかなか日が当たらず、目立たない存在です。

また、取り組みの成果を発表する場、活躍の場が少ないという現状もあり、それらを改善したい。そして、いけばなは、伝統文化であり、伝統も大切にしつつ、これまでの華道界には無い、斬新な事業にしたいという思いで事業内容を考えました。

高校生たちにとって、当事業を通して、高校生活の最高の思い出がつくれる事業にしたいとの思いから立ち上げました。



北海道地区大会の様子

◆◆◆事業の趣旨・目的
伝統文化・いけばなに誇りを

大会テーマは「今、咲かせよう、君の花」。

体育会の生徒に比べて、発表の場が少ない華道部員に、機会と目標と活躍の場をつくり、地域の代表として、いけばな発祥の地、京都・六角堂で花をいける喜びを感じ、日本の伝統文化・いけばなへの学びを誇りに思うことを目的としています。

出場までに重ねた努力、乗り越えたこと、そして仲間。大会を通じて多くの方の前で、お花をいけることで、高校生活にも大きな花を咲かせて欲しい。そして、出場者たちの将来を明るく照らしてほしいとの願いを込め、開催しています。

事業の趣旨・目的の達成はもちろん、出場者たちが「花の甲子園」を通し、感じ、そして経験したことが、華道を続けるきっかけになること、また、これからの人生の糧になることを願っています。

◆◆◆花の甲子園の内容

この大会は高等学校で池坊いけばなを学ぶ生徒3人が1チームとなり、制限時間内で制作した作品を発表する公開コンクールです。毎年7月末までエントリーを受け付け、8月から10月にかけ、全国各地で地区大会を開催。地区大会で代表となった高等学校を全国大会へ招待しています。

全国大会は、いけばな発祥の地　京都・池坊で開かれる最大最古の旧七夕会池坊全国華道展開催中に行われ、各地区の代表が〝いけばな　高校生日本一〟の座をかけて、全国大会に臨みます。

○地区大会
チームワークなども審査対象

このうち地区大会では、制限時間の45分以内に3種類の花器に1人1作をいけこみ、その後、持ち時間3分30秒で作品解説を行います。また、使用する花材は当日まで非公開。加えて、地元の花材を1種類持ち込むことができます。また、指定された三つの花器のうち、ミニチュア自由花の花器も各校で持参します。どんな花材を持ち込むか、ミニチュア花器に何を用いるかもアイデアが問われます。

そして、地区大会は、いけこみから作品解説まで全て公開形式で行っています。

会場は、お花をされていない方々にも高校生が真剣に花と向き合う姿をご覧いただき、華道の普及・振興に繋げたいとの思いから、オープンスペースで開催し、同世代や一般の方々にも応援をいただいています。

また、審査員には、池坊関係者だけでなく、地元の教育委員会やメディアの方々にもお務めいただき、いけばな作品としての優劣だけでなく、高校生らしい若々しくフレッシュな発想や、3人1組のチームワーク、パフォーマンスやプレゼンテーション力などの観点も審査対象としています。同時に、観客投票や出場者の相互投票も実施し、その結果も審査に加味し、それらの総合得点が最も高かった学校が地区代表校として全国大会行きの切符を得ます。各地区大会では、感動のドラマの連続。華道にかける熱い気持ちや姿勢が伝わってきます。



昨年の全国大会（1部）で真剣な表情でいけばなに取り組む高校生



作品解説の様子（1部）

○全国大会 固唾呑む観客、エントリー校の頂点が決定

出場者たちは、前日から京都入りし、同時期に開催されている池坊旧七夕会全国華道展を見学するほか、全国から集まった出場者と交流を深める親睦会に参加します。ライバルであり、お花を通じた「仲間」でもあるということを感じつつ、全国大会への士気を高め合います。

そして、全国大会当日。野球の甲子園さながらプラカードを持っての入場行進で開会。

全国大会は2部形式で開催し、まず1部では全国大会行きを掴んだ地区大会と同じ審査課題に取り組み、2部に進出できる3校を選考します。どの出場校も地区大会時に比べ、完成度が増し、地区大会以上の白熱した1部となります。

2部では、花ばさみをバトン代わりにし、リレー形式により3人で制限時間30分以内に1作合作をいけます。3人のセンスとチームワークを結集します。1部同様、花包みを開いて初めて知る花材をどのようにいけるか、作品が出来上がっていく様子にハラハラ・ドキドキの連続です。いけ終わった後は、1部同様に作品解説を行います。

観客の皆さんが固唾を呑んで見守る中、全エントリー校の頂点＝最優秀校が決定。表彰式では、全出場校（者）に賞状、楯やメダルを授与し、特に最優秀校には甲子園同様に、高校野球で優勝した優勝旗と同じ旗本で作られた総刺繍の立派な最優秀校旗を授与しています。

◆◆◆ 増える参加校、昨年は118校に 話題づくりにも工夫

「花の甲子園」は2009年からスタートし、昨年の2014年大会で6回目を迎えました。2009年大会は、事業を立ち上げてすぐの開催ということもあり、出場校は54校でした。しかし、いけばなに青春をかけ、真剣に取り組む高校生の輝く姿、既存のいけばなのコンクールにはない、斬新な形態が話題を呼び、メディアにも多数取り上げられ、年々出場校も増加。2014年大会には、過去最多の118校が出場しました。

全国大会は、いけばな発祥の地　京都・池坊と決まっておりますが、各地区大会はその地区内で持ち回りで開催しています。例えば、平城遷都1300年の際に奈良・東大寺の境内をお借りしたり、国民文化祭の応援事業として開催させていただいたりと話題づくりにも取り組んでいます。また地区大会には、同じ部員や卒業生の応援もあり、出場校だけでなく、支えていただく皆さまも年々増えてきています。

◆◆◆ 今後の展望

今後は各都道府県で地区大会を開催できるまでの事業にしたいと考えています。

そして、当事業の拡大はもちろんですが、当事業を通して、次世代への華道の普及・振興に寄与できればと考えています。特に、2020年東京オリンピックの開催が決定し、これからますますわが国の文化について振り返り、発信する機会が増えると考えております。そのような中で、当事業の果たす役割も非常に大きいと感じております。「いけばなに取り組んでみたい！取り組んで良かった！またやってみたい！」と思ってもらえる好循環を創っていきたいと考えています。

池坊華道会ホームページ
http://www.ikenobo.jp

大山名人生誕の地で小学生が熱戦

―将棋文化発信に向け、「倉敷王将戦」―



倉敷市文化産業局文化観光部文化振興課　課長
● 加藤　靖之

パチ、ポン、パチ、ポン

将棋の駒を指す音に続き対局時計を押す音が、小気味よく響く。

ここは、倉敷、美観地区にほど近い倉敷市芸文館。普段は、演劇に使われる舞台上に、きょう一日限りの対局席を設け、観客席に陣取る保護者からの熱い視線を背に小学生たちの盤上の戦いが繰り広げられる。

大山名人杯争奪全国小学生「倉敷王将戦」の1コマである。



低学年の部の対局　将棋盤の横にあるのが対局時計



大山康晴十五世名人

岡山県倉敷市は、かねてから将棋の盛んな地で、不世出の棋士である大山康晴十五世名人の出生の地である。

市では、その大山名人を顕彰し、日本の伝統文化である将棋を通じて市民文化の向上を図るため将棋文化振興事業を実施しており、その一つが、大山名人杯争奪全国小学生「倉敷王将戦」である。

◆◆◆ プロ棋士も誕生、小学生憧れの大会

倉敷王将戦は、平成7年に大山名人記念館の開館事業としてスタートした。当初、中国地区の小学生を対象に実施していたが、その後、徐々に対象地域を拡大し、平成14年に本市の中核市移行記念事業として、「第1回全国小学生倉敷王将戦」を開催した。当時としては、小学生を対象とした初の全国大会である。その後、大山名人没後20年にあたる第11回大会から、大会名に大山名人の名前を冠して「大山名人杯争奪　全国小学生　倉敷王将戦」とし、昨年で13回目を迎えた。

大会は、毎年8月上旬に、低学年と高学年の部に分かれて行われ、8人1組の予選リーグ戦を行い、各組1位が決勝トーナメントに進み、「小学生日本一」の座を争う。昨年の大会には全都道府県から128人が参加し、レベルの高い熱戦が展開された。また、この大会の過去の出場者からは、菅井竜也六段などプロ棋士も多く誕生しており、今や全国の小学生棋士が憧れる大会となっている。

◆◆◆ 子ども向けの将棋の普及事業

本市では、こうした全国大会に加えて、市内の小・中学生を対象とした将棋大会を毎年開催している。また、大山名人記念館では、小・中学生を対象とした将棋教室を開設。さらに、同館では、平成24年9月から菅井プロによる将棋特別講座も開講している。これらの取り組みは、将棋人口の

拡大と棋力の向上につながり、第10回文部科学大臣杯 小・中学校将棋団体戦に出場した倉敷天城中学校が全国制覇するなどの成果が表れている。

◆◆◆ 将棋文化の発信基地・大山名人記念館

次代を担う青少年の健全育成は、いつの時代においても重要な課題であるが、近年、音楽や演劇、漫画や書道など青少年が主体となる芸術文化活動の拠点づくりが進められている。

その意味で本市では、大山名人記念館を将棋文化の発信基地として位置づけ、将棋文化の拠点としてきた。青少年にとって、大山名人記念館は、将棋という日本の伝統文化に親しむ活動拠点といえる。

大山名人記念館の開館とともに歩み始めた「大山名人杯争奪　全国小学生　倉敷王将戦」の開催が励みになり、この大会への出場希望者が増え、さらに、大山名人記念館で将棋を学ぶ子どもが増えるという好循環が生まれている。



将棋の指導をする菅井六段

そして、本市は、「大山名人」、「倉敷」という地名を冠した女流のタイトル戦「大山名人杯倉敷藤花戦」を開催することで、将棋のまち倉敷を全国に発信してきた。

◆◆◆ 将棋を活用した教育にも重点

倉敷市教育振興基本計画において、目指す子供の姿として「心豊かにたくましく、生き抜く力をもった子ども」、「夢に向かって自ら学び、考え、行動する子ども」、「地域で輝く子ども」の三つを掲げている。そして、その実現に向け、学びの拠点を中心として教育力を高め、地域社会全体で子どもを育てる教育行政を推進するとしている。

子どもたちにとって、将棋は、思考力、集中力、決断力の養成につながるとともに、礼儀も身につくとされている。将棋に親しむことは、健全な子どもの育成へとつながる。

このことから、将棋を本市の教育の分野へ広げていきたい。

◆◆◆ 学校や地域で将棋の普及めざす

まずは、大山名人記念館の魅力を高めることで、より多くの小学校に、郷土学習の見学コースとして組み込んでもらう。将棋を知らない子どもでも、十分楽しめるよう展示に工夫を加え、将棋に興味関心をもつ子どもをさらに増やしていきたい。

次に、土曜授業や放課後教室を通じて将棋を学校にも普及させていきたい。市立の63小学校に「将棋、囲碁を扱うクラブ活動があるか」アンケート調査をしたところ、「ある」と回答したのは、約半数の31校だった。そのクラブ名も一般的な「将棋・囲碁クラブ」は少数で、「室内ゲームクラブ」、「テーブルゲームクラブ」、「文化クラブ」、「昔遊びクラブ」など千差万別であった。

「将棋・囲碁」だけだとやはり、クラブとしては、成り立ちにくいのだろうか。今後、できるだけ多くの小学校で、将棋クラブが創設されるよう働きかけていきたい。将棋のまちを標榜する本市の子どもには、小学校6年間で少なくとも一度は将棋を体験してほしい。

さらに、地域の拠点としての公民館などで将棋の交流会を普及させたい。将棋は、子どもから大人まで、異なる世代でも楽しめる競技であり、世代を超えてコミュニケーションを図る有効な手段である。公民館を中心に地域ぐるみで将棋に取り組むことは、地域の絆を取り戻し、まちの活性化にもつながるものと考える。

既存の芸術文化活動の拠点を活用し、将棋を教育へ広げる施策を通して、将棋のまち倉敷をさらに全国に発信していきたい。

今年の秋に将棋の一大イベントである「第41回将棋の日ｉｎ倉敷」、「大山名人杯第23期倉敷藤花戦」を実施する予定です。将棋の魅力と美観地区の魅力を併せてお楽しみいただけるこの機会にぜひ、倉敷市へお越しください。

全国の高校生が〝神楽の祭典〟に集結

―伝統の舞を披露し、交流深める―



安芸高田市企画振興部政策企画課 専門員 ● 戸田 邦昭

◆◆◆ 神楽甲子園に15校が参加

平成26年7月26、27の2日間、広島県安芸高田市で第4回「高校生の神楽甲子園」を開催しました。大会には、広島県から5校、島根県から4校、青森、岩手、静岡、鳥取、大分、宮崎の各県から1校、計15校が参加しました。

会場は、温泉と神楽が楽しめる施設「神楽門前湯治村」にある、神楽専用舞台「神楽ドーム」。高校生たちの精いっぱいの神楽に、観客は大きな拍手や声援を送り、会場のボルテージはどんどん上がっていきました。全国の神楽を見られる貴重な機会であり、また、高校生ならではの清々しい立ち振る舞いから、会場には爽やかな風が吹きます。1日約1000人ずつ、約2000人の観客は、神楽と大会の雰囲気を存分に堪能しました。



参加者の集合写真。笑顔の高校生ら



受付でパンフレットとうちわを手渡す高校生

◆◆◆ 神楽が舞いたいから地元の高校へ

広島県の北部中央、島根県との県境に位置する安芸高田市は、伝統芸能の神楽が盛んな地域です。神楽がこの地に伝えられたのは江戸時代の末期ごろ。以来、秋の収穫を神々に感謝するため、お祭りの日に神社で舞い継がれてきました。現在でも、22の神楽団が活動を続けています。

子どもたちは、物心つく前から神楽ばやしを聞いて育ちます。神楽ごっこをして遊び、保育所の発表会では、ダンスや合唱などとともに神楽が行われます。小学校になると、神楽団から、本格的に神楽を教わります。高校生になってようやく神楽団に所属できることもあり、「神楽が舞いたいから」と、地元の高校へ進学する子どもがいます。昼は勉強に励みながら、夜は神楽の練習。そして、公演活動のお手伝い。出演機会が多い神楽団ともなれば、年間の公演回数は40回をこえる団体もあります。高校生団員は、地域の大人たちとの縦社会の中で、神楽とともに社会性を学んでいきます。

◆◆◆ 神楽の全国大会をつくろう

高校生たちの神楽に対する情熱は、とどまることを知りません。学校でも神楽が舞いたいと、地元の吉田高校に神楽の部活動が誕生したのは自然の流れだったのかもしれません。吉田高校神楽部は、学校の文化祭と福祉施設への慰問などを中心に活動していました。3年生が中心になって、発表する演目、配役などを決めていきます。体育館の2階にある武道場に畳を敷き、練習を重ねます。

そんな高校生たちの熱心な姿、また、神楽部のOB、OGたちが地元に残り、神楽を舞いつつ、地域を支える人材になっていることは、まちにとっても大切なことでした。何とか、部員たちを

応援したい。そんな思いから実現したのが「高校生の神楽甲子園」でした。

◆◆◆ 舞うだけでなく、運営にも協力

夏休みに入って間もなく迎える本番当日。見る側にもうちわがいるほどの暑さの中、大会は開催されます。神楽を舞い終えた高校生たちは汗だくです。上演後、部員全員が舞台上に並びます。部の代表者に、司会が舞い終えた後の感想を聞きます。ほとんどの生徒が、「あそこをこうすれば良かった」、「もう少し練習をしなければならない」という反省の弁をならべます。高校生たちの向上心、目指す目標の高さが伺えます。

また、高校生たちはこの大会で、学校生活では体験できない運営面の役割も経験します。総合司会、入場の受け付け、清掃活動、神楽上演後の会場の観客から感想や応援のメッセージを届けるレポーターなどを交代で行います。神楽を行っていることで、いろいろな舞台に立つことがあります。その舞台を支える人たちの存在を知ることの大切さ、感謝をしながら舞台に立てる人材に育ってもらいたい。神楽甲子園には、こうした開催意義があります。



民泊地域との楽しい交流会の模様

◆◆◆ 高校生を民泊で受け入れ 地域との絆も深まる

大会に参加する高校生たちの宿泊は、民泊で受け入れていただいています。1校の部員たちは、一つの地域のいくつかの家庭に2～3人ずつ分かれて泊まります。受け入れる市民の皆さんは、遠方からはるばるやってくる高校生たちを、横断幕を掲げて歓迎します。宿泊した高校生たちが舞台に登場する時間には、神楽ドームに出かけて大応援団になります。2日間という短い期間ですが、別れの時になると、お互いに涙が流れる場面も。1・2年生には「また来年」、3年生には「またいつか」と再会を約束されています。



神楽の様子

島根県の高校から、出演前日に練習をしたいと申し出がありました。宿泊を受け入れた地域では、地元神楽団の練習場を提供しました。高校生たちは、白熱した練習を2回も地元の皆さんが見守る前で繰り広げました。地域の皆さんは、とても心打たれたそうです。それから、その高校とは車で1時間少々という近さも手伝い、地域の秋祭りで高校生が公演に再び訪れたり、学校の文化祭での公演に、応援に出かけたりといった交流の輪が広がっています。

◆◆◆ 神楽の後継者が増えることを願って

「今年も来られました」。連続して参加した生徒たちは、こう話しかけてくれます。「自分たちが出ても良いのだろうかと不安です」。初出場の高校の生徒たちは心境を教えてくれます。「一度は立ってみたい憧れの舞台でした」。近隣の高校生は、神楽専用舞台のことをこのように思ってくれているようです。いろいろな思いを持って、この大会に参加してくれています。高校生の神楽甲子園に参加することが、高校での活動のモチベーションの一つになればとも思います。

神楽が伝わる地域に生まれ、神楽とともに育った子どもたちが、地元の素晴らしさ、神楽の素晴らしさを実感し、地域で神楽を舞うという人生を選ぶ。大会が、こうした生き方のきっかけにつながればと願っています。また、全国に神楽を通じた友だちができ、どこかの神楽会場で再会するというような場面が増えていけば、大会を主催する一人として、うれしく思います。

「ことばの力」信じ、心豊かな人間育てる
―俳句甲子園、松山の夏の風物詩に―



第18回俳句甲子園実行委員長
㈲日野木工所　建具職人
● 日野　裕士

◆◆◆ 俳句甲子園の誕生まで

1998年に松山青年会議所の主催により産声を上げた俳句甲子園。実はそれ以前にも、地元の俳人や有志によって構想されたことがある。しかし、いずれも予算の問題でもつれ、立ち消えとなっていた。

当時の発起人の一人である俳人の夏井いつき氏が、俳句甲子園の実現を願い、各所で小中学生を対象とした俳句の普及活動や講演を行っていたところ、偶然、松山青年会議所の文化発信委員会の寺田太郎委員長、徳本晃久副委員長（いずれも当時）の両名に出会ったことから、歯車が回り始めた。彼らは22年間続けてきた「句碑めぐり」に代わる新しい文化事業を模索しており、俳句甲子園はうってつけの事業と判断したのである。

こうして松山青年会議所の力を得て、俳句甲子園は立ち上げにこぎ付けた。第1回大会の総予算は僅か60万円。そのほとんどを優勝旗（現在のものは2代目）と看板の作製に費やされた。



質疑応答の様子

◆◆◆ 松山青年会議所の奮闘

俳句甲子園は高校生5人で1チームを構成し、俳句の出来栄えや、鑑賞力を競う団体戦である。このような大会は全国を見渡しても例がなく、当時の青年会議所の担当者たちもひとつひとつのルールの意義を完全に理解していたわけではなかった。それでも彼らは開催に向けて、松山市周辺の全ての学校や関係機関を訪問し、事業の説明や出場募集・後援依頼に奔走した。

当時から現在に至るまで、俳句甲子園の運営スタッフはボランティアが中心である。毎月開かれる実行委員会のほか、委員会ごとの会合や、地域内外の関係者との折衝など、仕事をこなしながらの活動には苦労も多い。

◆◆◆ 俳句甲子園の意義と批判

前述のように俳句甲子園は5人1チームによる団体戦である。柔道の団体戦のようにそれぞれ1句ずつ出し合い、お互いの俳句に対して質疑応答をしたうえで、審査員が俳句の善し悪し（作品点・各チーム10点満点）と質疑応答（鑑賞点・どちらか1チームのみに最大3点まで）を評価し、勝敗を決める。そもそもなぜ団体戦なのか？俳句に勝ち負けをつけてよいのか？といったことに違和感を抱く人も多いが、実はこのルールには、教育的価値を考慮した「仕掛け」が潜んでいる。

様々な視点から句を鑑賞し、論じ合うことは、実は「座の文芸」たる俳句本来の楽しみ方ともいえる。参加者の目の前で勝敗が決まる対戦形式は、従来型のコンクールと比べてゲーム性もあり、楽しみながら真剣に俳句と向き合うことを容易にする。チーム戦だからこそ、個性を認め、助け合うことの大切さも学べるし、勝った時の喜びも大きい。

鑑賞点は、相手を言い負かせたかどうかではなく、自他の句に対して正確かつ豊かな鑑賞が出来たかどうかで決まる。以前は高校生の俳句も鑑賞力も未熟であり、チームを想うあまり議論に熱く

なることもしばしばあった。このため、見る人によっては「俳句の貶し合い」ととられることもあった。

俳句甲子園は、こうした批判にも真摯に向き合い、ルールに改良を加えたり、質疑応答に不慣れな初出場校へのOB・OG派遣事業等の教育的メニューを充実させたりと、たゆみなく進化し続けてきた。主催者側のみならず教育現場でも多大な努力がなされた結果、近年の大会では参加者全体の実力の底上げに伴って質疑応答のレベルも上がり、観客を唸らせるような見応えのある言葉のバトルが繰り広げられるようになった。

◆◆◆ 俳句甲子園の発展とOB・OGの活躍

第1~3回全国大会では、会場を松山大学に無償提供していただいていたが、第4回大会より、県内随一の集客を誇る大街道商店街で大会を開催している。まちなかでの開催には集客力や認知度を高める狙いがある。現在でも全国大会初日は、大街道商店街を12ブロックに分けて使用しており、買い物帰りの主婦や、通りすがりの若者が足を止めて試合に見入っている姿が多く見受けられる。市内で最も賑やかで人通りの多い場所へ会場を移したことにより、俳句甲子園は松山の夏の風物詩として広く市民に認知されるようになってきている。



審査員の旗判定

第5回大会以降、ある俳句甲子園OBの申し出がきっかけで、多くのOB・OGがボランティアとして大会を支えてくれるようになった。昨年の全国大会では北は関東、南は九州より約50名が自費で松山へ駆けつけた。なかには実行委員会へ入会し、年間を通して活動する人もいる。いずれ彼らが実行委員会を主導していく日も近いであろう。



松山市総合コミュニティセンター（キャメリアホール）での準決勝戦

また、高校卒業後も俳句の修練を積み、名だたる賞を受賞するOB・OGも多く存在する。俳句甲子園出身者が俳句界に新風を巻き起こしていることも事実である。

◆◆◆ 俳句甲子園の目指すもの

第11回大会より、主催は青年会議所の手を離れ、現在のNPO法人「俳句甲子園実行委員会」へと引き継がれている。現在の実行委員会メンバーには一般市民やOB・OGも多く含まれ、より組織としての幅を広めつつある。全国大会当日は、実行委員会メンバーやOB・OGのほか、一般ボランティアとして地元の学生や社会人約100名が大会を支えている。松山市役所や地域内外の協賛企業からも様々なご支援を受けながら、市民によるイベントとして徐々に成長を続けている。

初回はわずか9チームの参加でスタートしたこの大会も、今や参加チーム数は110を超え、6月には全国19都市にて地方予選を開催するまでに規模が拡大した。

正岡子規をはじめ、多くの俳人を輩出したこの街で、高校生たちが真剣に言葉と向き合う姿を多くの人に見て欲しいと願う。我々は、俳人を育成するためにこのイベントを主催しているわけではない。この俳句甲子園をきっかけに、言葉や季語を慈しみ、表現することの喜びを感じる心豊かな高校生が育つことを、心から願っている。

新たな書表現、「書道パフォーマンス甲子園」
―日本一の「紙のまち」で新文化を創造―



書道パフォーマンス甲子園実行委員会事務局 ● 眞鍋 幸雅

◆◆◆ 筆使い雄渾に 会場から感嘆の声

「お願いします！」

会場となった体育館に12人の高校生選手たちの声が凛と響きます。

その声を合図に音楽が鳴り、選手たちは動き始めます。選手は皆、黒い袴に若紫の襷（たすき）をかけ、演技場中心に置かれた縦4メートル、横6メートルの巨大な用紙に向き合います。

「はい！」

用紙の上に進んだ3人の選手は、掛け声と同時に書きはじめ、別の選手が黒、紫で絵のようなものを描きはじめます。

「はい！」

一方、大筆を持った2人の選手が威勢のいい掛け声とともに豪快に大筆を走らせます。その周りでは他の選手が襷を広げ、優雅に舞います。そして、先ほどの黒と紫によって描かれたものは蝶。

「せーの！」という掛け声とともに、選手たちが書き上げた作品（写真参照）を掲げながら、自身の想いを叫びます。

「勇往邁進！今、ふたたび、歩き出そう！」

競技を終えて、晴れやかな表情を浮かべる選手たちに、会場からは感嘆の声と盛大な拍手が降りそそぎました。



第７回大会の高松西高校の作品

◆◆◆ 日本一の「紙のまち」 産業振興など目的に全国大会

ご紹介したのは、平成26年8月3日に行われた「第7回書道パフォーマンス甲子園」でのある高校（高松西高校）の演技の様子です。実際の演技風景は公式ＨＰ（http://shodo-performance.jp/）で紹介していますので、是非、ご覧いただけたらと思います。

さて、愛媛県四国中央市はその名のとおり四国の真ん中に位置しており、「紙・パルプ・紙加工品」の出荷額が市区町村別で9年連続全国1位の日本一の「紙のまち」です。四国中央市は「お札と切手」以外の紙は市内で手に入るといわれるほど「紙」の生産・加工に特化したまちです。

そのような紙のまちで、書道パフォーマンスが産声を上げたのは今から約10年前。地元の愛媛県立三島高等学校の書道部が、高校の文化祭や地元のイベントで音楽に合わせて大きな紙に歌詞を書くパフォーマンス「書のデモンストレーション」を行っていました。

書道にはもちろん書道用紙を使用します。そして、当市は書道用紙も全国で大きなシェアを得ています。その親和性から、書道パフォーマンスに注目した行政関係者や地元の祭り「紙まつり実行委員会」が、新しい書の表現の場として、高校生の大会、それも全国大会を開催したら、市内の産業振興と新たな文化の創造発展につながるのではないかと考え、紙まつりの場で書道パフォーマンスを披露することを三島高校の書道部に依頼しました。

それをきっかけに、平成20年夏、地元の夏祭り「四国中央紙まつり」の一イベントとして、第1回書道パフォーマンス甲子園が開催されました。

◆◆◆ 映画公開で参加校が大幅増 活躍する高校生ボランティア

大会は書道パフォーマンス甲子園実行委員会（官民で構成、事務局は四国中央市）が主催して毎年夏に開催していますが、第1回大会の参加は3県から3校。地元商店街の一角で開催され、全国大会と呼ぶには参加校が少なく、今後発展していくのか、関係者の間に不安がよぎりました。翌年開催された第2回大会の参加は4県から5校。わずかに増加しましたが、まだまだ全国大会と胸を張れるものではありませんでした。

こうした中、本大会をモデルにした映画「書道ガールズ　わたしたちの甲子園」の制作が日本テレビから発表され、四国中央市がロケ地に選ばれます。平成22年5月に公開された、この映画の影響もあり、同年夏の第3回大会は11府県18校と参加校が大幅に増加。そして、平成26年の第7回大会には全国33都道府県の72校から参加申し込みがあるなど、順調にその規模を拡大しました。

また、本大会は多くの方の協力のもと、開催されています。大会で使用される巨大用紙は地元企業からの提供、優勝旗は当市の特産品である水引で作成され、大会に使用される物品や飲料水、本戦出場校への参加賞など、その多くが市内外の企業・団体からの無償提供です。



大会を支える高校生ボランティア

そして、大会の運営には一般ボランティアのほか、地元の高等学校3校の協力により、約100人の高校生ボランティアが参加します。高校生ボランティアのうち10人程度は、大会が開催される約1年前の企画段階から参加し、ポスターデザインなどのPR、大会中のアトラクション、出場校の歓迎企画などに取り組んでいます。

◆◆◆ 競技化に多くの課題 大規模化に伴い会場も変更

書道パフォーマンスを競技化し、全国大会として開催するには多くの課題がありました。まず、書道パフォーマンスの競技化は前例がなく、演技規則などがなかったため、書道パフォーマンスを実際に行っている高校や、書道家、演出家など様々な分野の方の意見を聞きつつ、演技規則や審査基準をつくりました。演技規則は大会後、実際に出場した学校の意見を聞き、より確かなものへと改正しています。

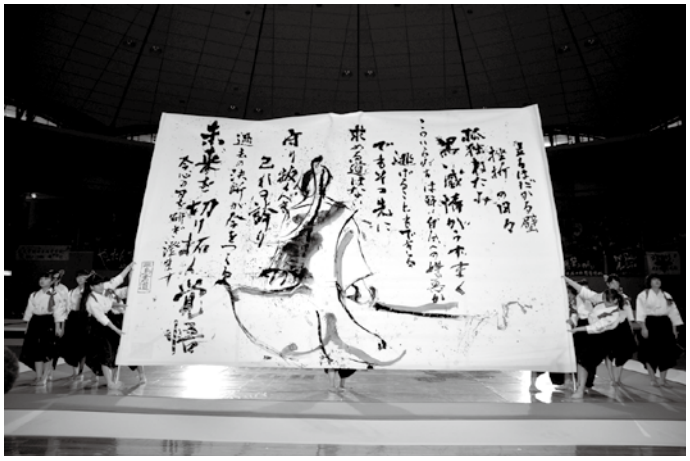
また、予選はDVD審査で、審査員はわずかな期間に応募のあった全ての高校の演技を見て採点していましたが、参加申込校が増えるに従い、負担が増大したため、7回大会からは地方ブロック制を採用し、ブロックごとに審査員を分けることで、審査員の負担を軽減しました。

また、年々、本戦出場校数・観客が増加したため、会場も商店街の一角から、より大きな会場へと急速な変更を迫られるようになりました。第7回大会までで開催場所は2回変更され、その都度、会場設営・選手動線などの入念な設定が必要になり、それまでの経験が活かせない点など非常に苦慮しました。

◆◆◆ 更なる発展のために

年々順調に規模を拡大し、多くの方が本大会を見るために当市へ訪れるようになりましたが、今後大会をより大きく成長させるためには、先述のもののほかにも、多くの課題が残っています。

今後、書道パフォーマンスが新たな書の文化として定着し、本大会がより多くの高校生にとって目標とすることができる大会となり、書道文化の振興に寄与することができるよう、大会の充実に一層取り組んでいきたいと考えております。


第７回大会優勝の三島高校の作品

「まんがサークル日本一」目指し、高校生が熱闘
―未来の巨匠も発掘、〝まんが甲子園〟―



高知県文化生活部まんが・コンテンツ課　主事　●　中野　智太

なぜ「まんが王国・土佐」か

まず、なぜ高知県が「まんが王国・土佐」と呼ばれているのか？

そういった疑問を持たれる方はまだまだいらっしゃると思います。

その理由には、諸説ありますが、古くは自由民権運動の原動力となった反骨心、表現の自由への欲求、そしてラテン的で明るく、新しいものを取り入れる気質があったことや、著名な先輩漫画家が後進の指導に熱心であったことなどだと言われています。

高知県出身の漫画家には、名誉県民でもあるやなせたかし先生をはじめとして、横山隆一先生、青柳裕介先生、最近では安倍夜郎先生、西原理恵子先生などがいらっしゃいます。



本選大会の競技風景。真剣にまんがを描く高校生ら

高校生の熱意で実現、まんが甲子園

本県では、まんがを貴重な文化資源として位置づけ、県民にもっとまんが文化に親しんでもらおうと、昭和63年から「高知まんがフェスティバル」（平成2年「あったか高知まんがフェア」に改称）を開催してきました。

このまんがフェアには、高知県内の高校の漫画研究部も参加していましたが、平成4年、このフェアを発展させようと、開催時期の変更等を検討していたところ、高校生から「自分達もさらに積極的に参加する場が欲しい！」との声が上がり、署名運動にまで発展しました。この熱意溢れる高校生の声を受けて、平成4年から「まんが甲子園」が始まったのです。それ以来、毎年多くの地元高校生や、まんが甲子園OB、OGがまんが甲子園の運営スタッフとして主体的に参加してくれています。

全国から300校超が応募 まんがサークル日本一を決定

まんが甲子園は、高校生まんがサークル日本一を決める競技大会で、今年で24回目を迎える歴史ある大会です。

ただ、甲子園と聞いて、多くの皆さんが頭に浮かべるのは、やはり野球の甲子園でしょう。

しかし、まんが甲子園には、野球の甲子園に勝るとも劣らない熱気と感動があり、高校球児なら ぬ、高校ペン児がバットをペンに持ち替え、毎年、熱い夏を闘っていることをご存知でしょうか？

毎年、全国から300校を超える応募があり、その中から厳しい予選審査を勝ち抜いた高校（30校）のみが、8月の第1土曜と日曜の2日間、高知県で行われる本選大会へ出場することができます。

つまり、ペン児にとっては、高知県が甲子園球場であり、憧れの場所になっているのです。

「まんが」なので、個人競技と思われる方が多いかと思いますが、先述のように、まんが甲子園は、まんがサークル日本一を決める大会で、チーム競技です。

1校1チーム3人～5人編成で、1人がメインで描くのもよし、皆でそれぞれ助け合いながら描くのもよし、各校それぞれに上手く役割分担をし、1枚のまんがを描き上げるチームワークの勝負です。

◆◆◆ テーマに沿い作画、笑顔で競技 有名漫画家も高校生を激励

また、まんがを描くといっても、各校が好きなものや得意なものを描けばいいというものではありません。作画にあたって、テーマが与えられ、そのテーマに沿ったまんがを描き上げなければなりません。

つまり、まんが甲子園では、絵が上手いということはもちろん重要ですが、テーマに対する想像力や発想力、メッセージ性なども求められていて、常識から離れがたい大人では思いもつかないような発想をする高校生には本当に驚かされます。

出場校は、もちろん最優秀賞を目指して競技していますので、入賞の喜びや落選の悔しさはひとしおです。しかし、高校生たちの笑顔で、楽しく競技をしている姿が何よりも非常に印象的です。

さて、まんがは一般的には娯楽と見られることが多く、学校や家庭で堂々とまんがに触れることはなかなか難しい現状があります。

また、まんがサークルは他の文化部とは違い、自分たちの活動を発表したり、他と競いあったり、表彰されたりという機会は少なく、この大会は自分たちの活動や実力を示すことができる機会としても、重要な意味合いを持ってきます。

作品審査はプロの漫画家や県内のまんがグループの代表などにより行われ、作品に対しての丁寧な講評も行われます。高校生にとって貴重な学びの場となっていることもまんが甲子園の魅力の一つです。

さらに会場には激励に駆けつけてくれる有名な漫画家の先生がいらっしゃいますので、直接お話しができるチャンスがあるかもしれません。



高校生を激励する藤子不二雄Ⓐ先生。まんが甲子園は憧れの漫画家と会える貴重な機会でもある



会場内には誰でも漫画を持ち込める出版社の出張編集部も開設される

◆◆◆ 「未来の巨匠」発掘プロジェクト 出版社が才能ある高校生をスカウト

まんが甲子園の本選大会会場は、競技が行われるだけではなく、漫画家になりたい方にとってビッグチャンスの場でもあります。

第16回大会から、大手出版社の編集部の方に大会会場で、才能のある高校生をスカウト、育成いただく制度が始まりました。参加いただく編集部の数も年々増え、今では約20もの編集部が参加くださっています。

編集部の方は、作画の様子や競技ブースに置いてある高校生が持ち込んだイラスト集などを見て、将来漫画家になれる可能性を秘めた生徒を探し、目を光らせています。

当制度でスカウトされた方の中には、現在、連載を持たれている方もおり、まんが甲子園がプロの漫画家への登竜門の一つになってきており、今後、この大会を通してより多くの漫画家が生まれ、そして、いつか審査員として帰ってきてくれるサイクルができることが目標の一つです。

高校生の熱い思いと官民をあげて次代のまんが文化の担い手を育てようと始まったまんが甲子園。これからも主役である高校生にとって、より魅力ある大会になるよう、そして、第30回、第50回と大会が続き、毎夏の風物詩として、「まんが甲子園の季節が来た！」と思っていただけるよう邁進していきたいと考えています。

今年のまんが甲子園も4月から予選応募が始まりますので、多くの高校から作品が送られてくることを楽しみにしています。

こども落語全国大会で地域を元気に
―各地から約40人、お笑い発祥の地に集結―



「こども落語全国大会」実行委員会
大会事務局長
● 黒木　隆文



昨年の第６回大会のオープニングの様子

ゼロからのスタート

今年で7回目を迎える「こども落語全国大会」の大会名に毎回銘打っているのが「お笑い発祥の地・宮崎」。これは「面白い」の語源の一説に由来している。

天照大神が天の岩戸に隠れて世界が暗闇に覆われたとき、ほかの神様たちが歌や踊りで気を引き外に出そうと試みたところ、天照大神が岩戸から顔をのぞかせ、世界が再び明るくなり、みんなの顔（面）が白く見えた＝「面白い」という説から、エンターテインメント発祥の地は、ひむか（日向）の国・宮崎であると位置づけた。

調べる限り、どこもお笑い発祥の地を名乗る地域はなく、先に言ったもの勝ちで大会名の一部とした。大会そのものも、未だ小中学生を対象とした落語の全国規模の大会はなく、「それなら日向市で大会を立ち上げよう」ということから始まった。ノウハウもコネもない、全くのゼロからのスタートだった。

平成20年の夏ごろの話である。

大会会長に日向出身の桂歌春氏「こども落語会」の存在が下地に

大会づくりに向けてのノウハウは皆無だったが、落語というジャンルの土壌はあった。

まず日向市出身の真打落語家、桂歌春氏の存在。落語芸術協会の役職を持つ歌春氏は、それまでも落語会で何度も県内で公演し、この大会の構想にも快く協力を約束し、大会会長に就任。大会名誉会長として、歌春氏の師匠である桂歌丸氏（落語芸術協会会長）の就任を取り付けてくれた。歌春氏は以後、プロデューサーのような立場で、大会の審査員となる江戸落語側のプロ芸人のブッキングも行っている。

さらに、全国でも珍しい、子どもだけの落語一門「ひむかこども落語会」の存在がある。

平成18年度から日向市文化交流センターで行われた文化教室「噺家入門」を受講した子どもたちが年々ステップアップし、地域のイベント出演等で欠かせぬ存在となり、その子たちが恒常的な落語活動ができるようにと、平成20年6月に旗揚げされたのが「ひむかこども落語会」である。

焼き肉店での出会いが出発点　点から線につなぎ、実行委立ち上げ

この落語会の指導を行っているのが、県内で落語活動を展開しているアマ落語家、柱大黒（はしら・だいこく）氏。アマとは言ってもかつて同郷の桂歌春氏のもとで前座修業していた経歴を持ち、地元ラジオ番組にも出演する、根っからの芸人である。

そして「ひむかこども落語会」の後援者的会長に就任したのが、日向市の経済界きっての落語通・黒木繁人氏。大黒氏と繁人氏は、新聞の取材を通じて知り合っていた。この2人に私が加わり、顔合わせに一杯やろうと集まった焼き肉屋さんで出た構想が、「こども落語全国大会」である。まさに瓢箪（ひょうたん）から駒。更に地元の牽引役となる実行委員長には誰が良いか？私の高校の同級生で、当時、日向青年会議所の役員として活躍

していた、那須久司氏の名前があがり、その場で電話したところ快諾。これで軸が固まった。

あっという間の流れ、出来事で平成20年の秋にはおよそ20名から成る実行委員会を立ち上げ。それから日向市役所を訪問し、記者発表まで行うのだから、今振り返っても当時の物事の動くスピード感は半端ではなかった。

だが全ては偶然でない、この必然の出会いを点から線へと繋いでいった結果である。全てはあの夜の、街のとある焼き肉屋さんから始まったと言っても過言ではない。

◆◆◆ 全国から40人以上が参加 大都市での開催に比べハンデも

こども落語全国大会は平成21年から6回開催（口蹄疫のため直前に中止となった平成22年の第2回も実施とカウント）され、近年は20近い都道府県から、40名以上が参加するようになり、徐々に各地へ浸透しつつあるようには感じる。大会は現在、毎年7月に行われ、小学生の部と中・高校生の部に分かれ、初日（土曜日）に予選大会を行い、2日目（日曜日）の決勝に進出する各4名を決定。最優秀賞は各1名。残りの決勝進出者は「優秀賞」となる。2位とか3位は設けない。従来、落語に順位はあまりそぐわず、「プロを発掘する大会ではない」という桂歌丸名誉会長の意思が反映されている。

そのかわり全国からの出場者が情報交換できる場として好評な交流レセプションを大会初日の夜に開催。その時に、審査員特別賞や日向市長賞など各特別賞を数多く贈ることで、多くの出場者に喜びのチャンスを与えている。



大会のお楽しみ企画、交流レセプション。全出場者と審査員の落語家、一般市民などが触れ合う場として人気がある



昨年の大会で決勝に進出した８人。小学生の部と中・高校生の部、各４人が選ばれる

しかしまだまだ、大都市圏での開催と比べ、出場希望者にとって交通の便・旅費がネック（旅費の一部助成は行っているが、それでも家族で宮崎県まで来るのは負担が大きい）となるなど課題も多い。第1回大会時では、市を代表するお祭り「日向ひょっとこ夏祭り」との日程重複による宿泊施設確保の問題、第2回大会では県内を襲った家畜伝染病・口蹄疫の感染拡大防止のための中止決定など、多くのトラブルにも見舞われた。

そんな時も、時間をかけて真摯に向き合い円満に解決してきた。笑いに溢れる大会なので、大会後の完結はすべて笑顔、ハッピーエンドなのである。

◆◆◆ 実行委員会に若手市職員が参加 「落語が地球を救う、かもしれない」

石の上にも3年と言うが、当大会も第5回大会ごろになると随分浸透し、「全国大会と銘打つからには最低15都道府県以上から出場者を」という目標もクリアできるようになった。

毎年楽しみに観覧に訪れる地域のお年寄りも多い。しかし、収支的にみれば、収入源の半分以上を日向市からの補助金と、共催団体である公益財団法人日向文化振興事業団の自主文化事業費でまかなっている。

こうした中で、昨年より実行委員会メンバーに若手の市職員も10名程加わり、組織の活性化に大いに貢献していただいた。大会は年々盛り上がりを見せている。節目となる第10回大会を一つの大きな目標に、子どもたちの成長とともに育っていく大会にしたいと思っている。本気で「落語が地球を救う、かもしれない⁉」と信じてやまない現在の実行委員会メンバーとなら、きっと成し遂げられそうだと、いつもワクワクしている自分がいる。

地域行政情報誌「わが街事典」を発行
―公費負担ゼロ、地方創生にも貢献―



株式会社サイネックス
取締役常務執行役員企画開発本部長
● 塩野　勝

市・特別区の半数をカバー

国の財政悪化や少子高齢化、過度な東京一極集中など先行きに不透明感が漂うなか、地方の再生なくして日本の再生はないと考えられます。そのためには公共のあり方を変革する必要があり、そこでキーワードとなるのが「官民協働」であると考えます。



全国の地方自治体とサイネックスが共同発行している地域行政情報誌

公共サービスの一部を官民が協働で担う。それが地方活性化に繋がり、民間にとっても新しいビジネスが生まれてくると考えます。

株式会社サイネックスは創業以来、永らく、エリアに密着した独自のメディアを開発、暮らしのコミュニケーションに役立つ情報を提供してまいりました。そして平成19年からは全国の地方自治体と連携し、官民協働による地域行政情報誌の発行に取り組んでいます。

サイネックスが提案する地域行政情報誌とは、自治体が関わる防災・防犯、各種届出・手続き、保険・年金、医療・介護、子育て・教育など様々な行政サービスをわかりやすく掲載することはもちろん、転入者を含めた地域住民の方々が自分たちの暮らす「まち」にもっと愛着を深めてもらえるよう、歴史や観光スポット、お祭りや特産・名産品までを幅広く取り上げ、それらの記事を1冊に束ねることで構成されています。

つまり行政サービスは毎日の暮らしを支えるうえで大切な情報ではありますが、やはり堅苦しい文字の羅列や数字を並べただけではどうしても退屈な印象を拭いきれません。しかし、その誌面に美しいビジュアルや気の利いたコピーを織り交ぜた、住民目線に立った記事を加えることで、老若男女すべての世代に受け入れてもらいやすい、オリジナルな地域行政情報誌として成立するわけです。役に立つ情報と見て楽しい誌面、その二つを融合させた媒体は、まさに保存版と呼ぶにふさわしい冊子です。近年は予想だにしない天災等も多く、非常事態が起こった際、冊子に掲載されていた防災情報がとても役に立った等の声も届けられるほどです。

ちなみに平成26年12月末までにサイネックスが手がけた地域行政情報誌は、平成19年4月に発行した大阪府和泉市を皮切りに523自治体を数えます。全国の地方自治体数（市＝790、特別区＝23、町＝745、村＝183）は1741ですが、市・特別区で見ると、発行は813自治体のうち423自治体で、そのカバー率は52％と半数を超えています。また、行政情報は年ごとに改められるものも多くあり、それらの内容を更新した改訂版等の発行を含めると、その累計発行部数は4500万部にも及びます。

公費負担ゼロの協働事業

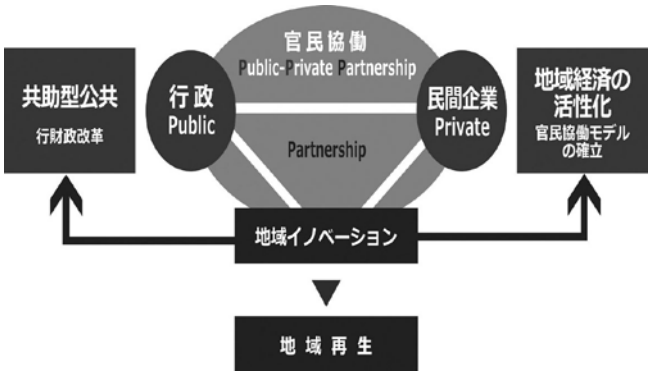
サイネックスが発行する地域行政情報誌は「わが街事典」というブランド名で統一されています。そして

この媒体の最大の特徴は、官民協働による公費負担ゼロの事業である点といえるでしょう。

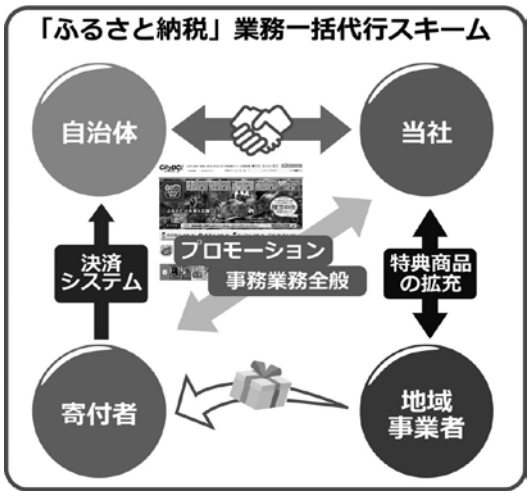
近年、多くの自治体は財政的な問題を抱えています。本来、市民サービスの一環である地域行政情報誌の発行は自治体が担う役割といえますが、どうしても莫大な製作費用がかかってしまうため、このようなサービスを提供したくてもできないのが現状ではないでしょうか。そこでサイネックスは地域行政情報誌の発行を広告事業化し、発行にかかる全ての経費を広告掲載料で賄うという手法でこのプロジェクトを実現させました。そして、この官民協働事業は、自治体とサイネックスのパートナーシップに基づく役割分担によって成り立っているのです。

現在、地域行政情報誌の発行は自治体からの要望もあり、市民への行政サービス全般を収録した総合行政情報だけにとどまらず、福祉や子育て、ごみや市内交通、あるいは防災・防犯といった、限定されたカテゴリーに特化し、情報をより深く掘り下げるなど、それぞれのニーズに沿った情報誌制作にも発展しています。

また完成した「わが街事典」等の情報誌を、それぞれ電子書籍化することによって各種媒体がより市民生活の手助けになるべく利便性の向上にも力を注いでいます。



官と民が協働して一体となって取り組むことにより、その相乗作用から新たな発想が生まれ、それが地域活性化に繋がる



サイネックスが推進する「ふるさと納税」業務一括代行の枠組み。ホームページは「わが街ふるさと納税」(http://www.citydo.com/furusato/)

ふるさと納税に対する取り組み

平成25年12月からは、全国の自治体が行うふるさと納税の情報が一覧して比較検討できる「わが街ふるさと納税」という総合情報サイトを開設しました。ふるさと納税とは個人が寄付する自治体を選んで納税することで、お礼として特産品が届けられ、翌年、確定申告を行えば一定の金額が税金より控除される制度です。現在、サイネックスはサイト運営をさらに活性化させるとともに、各自治体と官民協働形式による民間への一括業務代行によって、行政の負担軽減と寄付の拡大を支援しております。

折しも第2次安倍改造内閣がこれからの重点政策として掲げるのは、地方創生であり、なかでもふるさと納税においては、その拡充を主軸とした制度改革が行われました。今回の改正によって、控除額の見直し、確定申告の簡略化などが実現し、ふるさと納税はこれまで以上に使い勝手の良い制度として、一層の需要拡大が見込めると確信しております。

本当の地域社会貢献型企業とは

ご紹介したような事業形態は1980年代に破綻寸前だった英国を救ったNPM型行財政改革、それから変化したPFIやPPPと近いものであると考えています。手厚い福祉政策と国営企業による経済衰退で、財政が著しく悪化し、サッチャー政権は市場原理に基づいた大胆な公共改革を行いました。その後の政権では、過度な市場原理主義が修正され、共助型の公共へと改革が進められました。日本経済が逼迫するなか地域活性化が不可欠であり、サイネックスが推進する官民協働事業も地域活性化の一助となるものと確信しております。

新聞やテレビでは、アベノミクス効果で日本の景気は上昇傾向であると報道されていますが、官民協働の手法が貢献するものと存じます。

今後もサイネックスは「わが街事典」をはじめとする地域行政情報誌の発行を拡充していくとともに、ふるさと納税の利用促進や地域が抱える課題に取り組み、日本全体を見据えた地域再生を推進してまいります。

地域パンフレット創造セミナー

魅力あるパンフレットづくりをテーマに

～地域活性化センターが初のセミナー開催～

地域活性化センターでは、地域情報の発信のため日本橋プラザビル（東京都中央区）1階に「ふるさと情報コーナー」を設け、都道府県や市町村の観光・イベント等のパンフレット約2600種類を展示し、同ビルを訪れる一般の市民に年間約30万部を提供している。

こうしたパンフレットは旅行計画を立てる際の参考になっているが、センターではより魅力的なパンフレットを製作するにはどうすればいいか、そのノウハウを学んでいただこうと、2月3日に全国の自治体関係者を対象に初の「地域パンフレット創造セミナー」を開催した。



講師の楓千里氏（左）と南伸坊氏



セミナーの様子

セミナーには行政関係者30人が出席。当センターが設けた「ふるさとパンフレット大賞」の選考委員2人と昨年の同賞大賞に輝いた高知県須崎市の担当者を講師に招き、事例発表とディスカッションを行った。

事例発表では、須崎市観光協会の山中貴志史事務局長、パンフレットの製作を請け負った㈱フロムダイムエージェンシーの荒井徹代表取締役が大賞パンフレット「すさき手帖」について発表を行った。

まず山中事務局長が須崎市の紹介をした後、荒井氏が「すさき手帖」作成の過程について説明。「親しみやすいものを」「須崎の土地感を出そう」などコンセプトづくりの経緯や完成までの苦労話などを語った。

続いて、「ふるさとパンフレット大賞」選考委員の南伸坊氏（イラストレーター）、楓千里氏（㈱JTBパブリッシング執行役員）、山中事務局長、荒井氏の4人がディスカッション。パンフレット大賞の受賞作品を題材に「旅に出たくなる、思わず手にとるパンフレット」について意見を交わした。選考委員の両氏から選考審査時のエピソード、評価ポイントなどの話があり、楓氏は「パンフレットの大きさや紙質は大きなポイントだったのではないか。スマートフォンなど無機質なものを常に持ち歩いている今だからこそ、（人々は）反対に心地よい手触りを欲しているのではないか」と述べた。

また、南氏は発注方法や仕事の進め方について、「仕事に対する情熱は出来上がりを見ると伝わるもの。発注側からすると、情熱を持って仕事をしてくれる人材を見つけることが重要なのではないか。デザイナーやカメラマンなど才能のある人材がたくさん埋もれている。それらを発掘することが、良いものを作る上での一つの条件になる」と強調した。

終了後、参加者からは「普段聞けない製作者や専門家の生の声はとても参考になった」「パンフレットの製作意欲が湧いた」などの感想が寄せられた。

編集委員 ● 津隈 祐喜



発表する山中事務局長（左）と荒井氏

アンテナショップ報告書

自治体アンテナショップ報告書を発行

～人気店の戦略なども紹介～

地域活性化センターでは、毎年、東京都内の自治体アンテナショップの実態調査を行い、ホームページやメディア等で公表しているが、このほど初めて冊子にまとめた。

この「自治体アンテナショップ実態調査報告書」は3部構成で、「地域活性化センターの自治体アンテナショップ支援事業について」、「自治体アンテナショップ実態調査」、「事例報告」を掲載した。都内のアンテナ店の状況に加えて、新たに調査を行った東京都外、海外の自治体アンテナショップの実態や、都内にある2店（北海道と鳥取・岡山両県の共同ショップ）の活動状況を紹介している。概要は以下のとおりである。

都内のアンテナ店の状況

報告書は、都道府県を通じて調査した平成26年度の「自治体アンテナショップ実態調査」を中心とし、平成21年度～25年度までの都内アンテナショップの調査結果も併せて掲載した。調査項目は、設立年、設立主体、スタッフ数、店舗面積、年間入館者数、年間売り上げ、設立目的・効果、事業内容、運営主体など。

都内アンテナショップは、26年度の調査後も出店が続き、平成27年3月1日現在で57店に増加している。

都外に46店、新潟県はロシアにも出店

26年度の調査では、初めて東京都外と海外の調査を行った。都外のアンテナショップは46店あり、出店数は、平成23年5店、平成24年6店、平成25年11店と増加傾向にある。中でも大阪府内は最も多く9店あり、続いて福岡県7店、神奈川県5店、愛知県4店の順に多かった。



報告書

海外に出店しているアンテナショップは、新潟県からロシアの2店が報告された。同県の「おもてなし館」は、ウラジオストック市（平成24年設立）、ハバロフスク市（平成25年設立）に出店されており、スタッフ数、店舗面積、事業内容なども掲載した。



とっとり・おかやま新橋館

人気ショップなどの事例報告も

一方、活性化センターでは、平成26年9月にオープンしたばかりの「とっとり・おかやま新橋館」（鳥取県・岡山県）と、平成11年に開業し、常に年間売り上げのトップクラスを維持している「北海道どさんこプラザ」（北海道）に取材し、実情を調べた。

2県が共同で運営する「とっとり・おかやま新橋館」については、新規出店のコンセプトづくり、店舗探し、内装・レイアウト等ハード整備、事業委託、運営方法などのプロセスを伺い、報告書にまとめた。

また、「北海道どさんこプラザ」の事例では、すでに知名度抜群の人気アンテナショップがどのようにして魅力を維持してきたかについての戦略を紹介した。例えば、収益が上がる売り場の一部に、テスト販売コーナー「ルーキーズステージ」を設置するなど、様々な工夫を行い、常に新しさを追求していることが分かった。

なお、本報告書はご希望者には500円（送料別）で販売している。ご購入の申し込みは総務課（03―5202―6131）まで。

地域づくり情報課 ● 畠田千鶴



「北海道どさんこプラザ」のルーキーズステージ

香川大学直島地域活性化プロジェクト

香川県直島町

島の活性化へ、大学生が古民家カフェを経営

～地域との交流で〝人間力〟養う～

アートの聖地

直島（直島町）は、香川県高松市の北方約13キロの瀬戸内海に浮かぶ大小27の島々からなる群島の町である。島の南部エリアには、様々な現代アート施設や著名なアーティストの作品が数多く展示され、それらが瀬戸内海の美しい風景とともに展開されており、アートの聖地として、国内外から大勢の観光客が訪れている。

今回は、直島の古民家を利用したカフェ「和 cafe ぐぅ」を中心に直島の地域活性化に取り組んでいる「香川大学直島地域活性化プロジェクト」の取り組みについて、代表者で香川大学経済学部教授の古川尚幸氏、「和 cafe ぐぅ」を運営する香川大生のお話を交えて紹介する。

直島の活性化でプロジェクト

「香川大学直島地域活性化プロジェクト」（以下、「プロジェクト」という）は、学生主体のプログラムで、香川大学内の任意団体である。古川教授が直島を訪れた際に、島の住民から「アートを目的とした観光客が増加しているのに、島内に食事や休憩ができる場所が少なく、申し訳ない」という話を聞いたことがきっかけ。古川教授がそれをゼミで話したところ、学生たちから「自分たちでカフェをやってみよう」という声が上がり、平成17年10月にプロジェクトがスタートした。

プロジェクトでは「座学では得ることのできない実学を身に付ける」「地域交流の中で人間力を磨く」「直島の地域活性化を図る」の3つをテーマとし、活動している。プロジェクト発足時には6人で活動していたが、現在では80人を超える学生がリーダー、副リーダーを中心にまとまり、このプロジェクトに携わっている。

プロジェクトの運営にかかる費用は、行政からの補助金を利用するのではなく、大学内の資金と学生たちの出資（1口1万円で、卒業時に返還）、カフェ運営の利益などで賄っている。

「和 cafe ぐぅ」

プロジェクトの活動拠点となるのは、平成18年8月に直島本村地区で開業した「和 cafe ぐぅ」である。「ぐぅ」という店名には偶然（思いがけない出会い）、待遇（おもてなし）、お腹がなる音「ぐぅ」、環境にgood（グー）の4つの思いが込められている。

カフェの開設にあたっては、開業資金や衛生面の資格、物件の確保など様々な課題があり、一時は挫折しそうになったこともあったという。



左から香川大生の浮田菜央さん、福本真明さん、三宅あずささんと古川尚幸教授

★団体プロフィール★

設立年＝平成17年
設立・運営主体＝香川大学生と教員
代表者＝古川尚幸教授
構成員＝80人
〈連絡先〉
〒760-8523
香川県高松市幸町2-1
香川大学経済学部古川研究室内
電話：087-832-1895
URL:http://fourier.ec.kagawa-u.ac.jp/~naoshima/goo/mainframe.htm

特に保健所の営業許可を得ることが大きなハードルとなったが、それは古川教授が許可を取ることで乗り越えた。こうして学生と古川教授、島の住民団体などが一体となって様々な課題を解決してカフェをオープン。昨年、開業8周年を迎えた。



「和 cafe　ぐぅ」の看板


香川県産の「いりこ」を使ったいりこごはん

「和 cafe ぐぅ」は土日、祝日のみ営業しており、1日5～8人の学生スタッフがシフト制で運営に当たり、仕入れ、調理、接客を担当。お客さんには、直島特産の海苔を活用した「直島☆のりのり丼」、香川県産の「いりこ」を使った「ぐぅのいりこごはん」などのフードとデザート（期間限定を含め数種類）、ドリンクを提供し、好評を得ている。

また、担当するスタッフによってサービスに差がでないよう基本中の基本からのマニュアルを作成し、定期的に更新したり、外国人観光客が多いためメニュー表に英語表記を付したり、オーダー用の英語シートを作成するなどの工夫も重ねている。


カフェの様子

学生の思いに温度差も

プロジェクト発足から今年で10年。いくつかの課題も浮かび上がっている。

例えば、活動に携わる学生が80人を超え、プロジェクトに対する学生の思いに温度差があり、活動自体が他人事になっている人がいるという。新年度から副リーダーの香川大生、福本真明さんは「せっかくプロジェクトに関われる機会があるのに活かさないのはもったいない」と指摘。それでも、プロジェクトに参加している学生にもアルバイトやサークル活動で時間的制約があることを考えると、「『もっと頑張りなよ』とも言えず、もどかしい思いを抱えている」と浮田菜央さんは言う。

そこでリーダーたちは、学生に楽しんで参加してもらうための方法として、直島で行われるイベントに誘ったり、島の住民とのつながりを作ってもらったり、さらには一人一人が参加しやすい環境を整えるなど身近なところから始めたいという。

地域との交流機会増やす 新たな試み、「直島未来会議」

一方、プロジェクトの現場である直島を取り巻く環境も大きく変化しつつある。活動当初から現在までの間にカフェを含む飲食店が大幅に増加したため、当初は「和 cafe ぐぅ」を訪れていた島の住民たちは新しい店舗に出向くようになり、結果的にカフェを通じた地域との交流機会が減ってきている。

このため、地域のお祭りに参加することや地元住民団体「うぃ・らぶ・なおしま」と共同で地元の子ども向けの体験学習型イベントを開催することなどにより、積極的に交流の機会を増やしてきた。また平成26年度には新たな試みとして、「直島未来会議」を開催。この会議は直島町役場の協力を得て、住民を巻き込んだまちづくりワークショップを行い、そこで明らかになった地域課題を学生・島民・自治体が協力して解決していくための取り組みで、これにより住民と共に直島の魅力を一層高めていく考えだ。

今後も、この学生主体のプロジェクトが直島の活性化に貢献することを期待するとともに、学生たちには楽しみながら「直充」（直島地域活性化プロジェクトで充実する）生活を送ってもらいたいと切に願っている。

編集委員　●　田村保典

センター通信

平成 27 年度 地方成功人材のマッチングによる土日集中セミナーのお知らせ

第 1 回「こころを育み豊かに生きる地域を目指す」

～ふれあい囲碁・木育推進活動から見たこころのふれあいとは～

人と人・心と心がつながる「ふれあい囲碁」と、木に親しみ・木を活かし・木とともに生きていく「木育」を通して、こころ豊かに生きることのできる地域づくりを学びます。ふれあい力を UP し、子育て・福祉・教育・医療・国際交流など様々な分野で活用していきましょう！

【講　　師】 安田 泰敏 氏（一般社団法人 IGO コミュニケーションズ理事長）
多田 千尋 氏（認定 NPO 法人日本グッド・トイ委員会理事長）
伊藤 寛晃 氏（NPO 法人翔和学園学園長）
原 安喜子 氏（一般社団法人 IGO コミュニケーションズ理事）

【開催日程】 4 月 25 日 (土)13:00 ～ 26 日 (日)13:00



安田 泰敏氏

第 2 回「酒蔵ツーリズムによる地域活性化」

「和食」の世界無形文化遺産登録を受けて、今、海外でも「日本酒ブーム」が起きていると言われています。そのような中、酒蔵のある“まち”の食や文化、歴史をまるごと体感してもらおうという「酒蔵ツーリズム」の取り組みが注目されています。5 月のセミナーでは、日本酒の産地を軸に観光客を呼び込む、酒蔵を観光資源とした地域活性化のヒントを探ります。

【講　　師】 平出 淑恵 氏（株式会社コーポ・サチ代表取締役）
中村 雄一郎 氏（鹿島市観光協会会長）
Rebekah Wilson-Lye 氏（ライター・SAKE コンサルタント）

【開催日程】 5 月 23 日 (土)13:00 ～ 24 日 (日)12:30



平出 淑恵 氏

●各回共通

【会　　場】 地域活性化センター大会議室（東京都中央区日本橋 2-3-4 日本橋プラザビル 13 階）
【対 象 者】 地域活性化に熱意のある方
【受 講 料】 一 般 25,000 円、大学生 10,000 円 ※各種割引制度あり
【申込方法】 FAX(03-5202-0755) または E-mail（creative@jcrd.jp）
【問い合わせ先】 クリエイティブ事業室 (TEL : 03-5202-6134)
※ 詳しくはホームページをご覧ください。 http://www.jcrd.jp/

地域づくり団体の活動をご紹介します　～新編集委員が始動～

今年、「地域づくり」の編集委員として、全国各地の地域づくり団体を取材し、各団体の熱意あふれる活動を紹介してまいります。地域づくりに取り組む方々に参考となる情報をお伝えできるよう頑張ります。どうぞよろしくお願いします。



前列左から木瀬、一木、長門、小口、後列左から神坂、相澤、近森、田村、仲野



前列左から渡邊、津隈、武久、後列左から佐竹、西内

第19回ふるさとイベント大賞表彰式・平成26年度地方創生フォーラムを開催

地域活性化センターでは、例年３月上旬に「ふるさとイベント大賞表彰式」と「地方創生フォーラム」を開催しています。今年度は、平成27年３月４日（水）に東京国際フォーラムで開催し、390名を超える方にご参加いただきました。来賓には二之湯総務副大臣、北川フラム選考委員長、竹下景子選考委員をお招きしました。内容についてご報告いたします。



受賞者の皆さん


あいさつする二之湯副大臣


総評を述べる北川委員長と竹下さん

■プログラム

１３：００～　第１９回ふるさとイベント大賞　表彰式

１４：１０～　地方創生フォーラム
【基調講演】　「森から始める地域の再生」
C.W. ニコル　氏（作家・一般財団法人C.W. ニコル・アファンの森財団理事長）

１５：２５～　パネルディスカッション「田園回帰が地方を救う」
コーディネーター　松本　克夫　氏（ジャーナリスト）
パネリスト　塩見　直紀　氏（半農半X研究所代表）
杉本　博文　氏（福井県池田町長）
荘林　幹太郎　氏（学習院女子大学国際文化交流学部教授）
吉田　基晴　氏（サイファー・テック（株）／（株）あわえ代表取締役）

選考委員長の総評　北川 フラム氏　アートディレクター　株式会社アートフロントギャラリー代表取締役



今回は、古くからの伝統行事で深い魅力のあるイベントが多くエントリーされました。もちろんこれらの行事は、さまざまな工夫によって新しい魅力あるものになっていますが、それは当事者の努力と、そこに参加する多くの人々によって受け継がれていったものです。その意味で大賞の「塩竈みなと祭」と最優秀賞の「奥能登珠洲の秋祭りと“ヨバレ”」は、島国日本列島の成立と文化の伝播を伝える祭りの双璧であると言えるでしょう。

受賞された殆どのイベントが、地域に古くから伝わる神事に関係するものだったことは特筆すべきことです。地域に根ざさない瞬間的な人寄せのイベントではなく、地域の風土のなかで育まれた祭りが、海外を含めた他地域とつながり、土地のローカリティが活きていくことが見直され、大切にされだしたことは、効率第一の均質化していく現代の風潮のなかでとても重要なことだと思います。

これからも私たちはふるさとイベント大賞を通じて、日本全国の様々なイベントと、その地域の魅力の発信に貢献できるよう努めて参ります。

第 19 回ふるさとイベント大賞

「ふるさとイベント大賞」は、全国各地で数多く開催されている地域の活力を生み出すイベントを表彰し、全国に向けて紹介することによって、ふるさとイベントの更なる発展を応援しています。
今回で 19 回目を迎え、新たに「内閣総理大臣賞（大賞）」、「ふるさとキラリ賞」を創設しました。
全国からの応募総数は 172 件で、「ふるさとイベント大賞選考委員会」の審査により、各賞が決定しました。

大 賞（内閣総理大臣賞）



塩竈みなと祭（第 67 回）

【主催団体】塩竈みなと祭協賛会（宮城県塩竈市）
【イベント概要】２つの神社の御神輿を乗せた御座船が、風光明媚な日本三景松島湾内を巡幸する祭りです。氏子たちが、重さ１トンもの御神輿を担いで神社の表坂をかけあがり、御神輿が神社に戻る祭りのフィナーレは、荘厳かつ勇壮で見る者を圧倒します。

最優秀賞（総務大臣表彰）



奥能登珠洲の秋祭りと「ヨバレ」（第 65 回）

【主催団体】珠洲まつり特別委員会（石川県珠洲市）
【イベント概要】秋の収穫シーズンには、市内 60 カ所以上で氏神様の祭りが行われ、親戚や友人などをもてなす能登独特のもてなし文化「ヨバレ」も行われます。祭りでは神輿の先導役として延べ 100 基以上のキリコ（奉燈）が担ぎ出されます。

優秀賞（地域活性化センター会長表彰）



レッツウォークお山参詣（第 31 回）

【主催団体】岩木山観光協会（青森県弘前市）
【イベント概要】千年以上続く伝統行事「お山参詣」の２日目に実施されるイベント。白装束に身を包んだ参拝者達が鮮やかな 15 mもの大きなのぼりを揚げ、「サイギサイギ」と唱和しながら岩木山神社を目指します。

優秀賞



勝山左義長まつり（回数不詳）

【主催団体】勝山左義長まつり実行委員会（福井県勝山市）
【イベント概要】300 年以上の歴史と伝統を誇る勝山左義長は、奥越地方に春を呼ぶまつりと言われています。まつりの最終日には、神聖な御神火を御神体に灯し、一年の五穀豊穣と鎮火を祈願する「どんど焼き」が行われます。

優秀賞



寒河江まつり「神輿の祭典」（第 32 回）

【主催団体】寒河江神輿會（山形県寒河江市）
【イベント概要】秋の夜空の下、約 30 基の神輿渡御、すべての担ぎ手と観衆が、心も身体も熱く一体となる祭りです。平成 26 年に、寒河江市制施行 60 周年を記念して、「市民のまつり」に制定されました。

ふるさとキラリ賞



通くじら祭り（第 23 回）

【主催団体】通くじら祭り実行委員会（山口県長門市）
【イベント概要】通地区にある鯨の胎児を埋葬した「鯨墓」建立 300 周年を記念して 1992 年に始まった祭り。古式捕鯨の実演、鯨唄、和船競漕大会を通して、通地区ならではの精神的な文化を感じ取ることができます。

ふるさとキラリ賞（選考委員会表彰）



わらじで歩こう七ヶ宿（第 29 回）

【主催団体】七ヶ宿町･七ヶ宿町観光協会（宮城県七ヶ宿町）
【イベント概要】「山中七ヶ宿街道」とともに発展してきた歴史の町ならではの財産を生かした個性的なイベント。参加者とともに全町民が毎年楽しみにしているもので、宿場町の歴史を人々に伝えています。

選考委員特別賞（選考委員会委員長表彰）



チャグチャグ馬コ（回数不詳）

【主催団体】チャグチャグ馬コ保存会（岩手県盛岡市・滝沢市・矢巾町）
【イベント概要】盛岡八幡宮までの 13km の道のりを、色とりどりの装束をまとった 100 頭近くの馬が鈴の音を響かせながら行進する伝統の祭典。岩手山を背景とする田園風景や盛岡城下の歴史的なまちなみが馬コの魅力を引き立てます。

ふるさとキラリ賞



いぜな８８トライアスロン大会（第 27 回）

【主催団体】伊是名村（沖縄県伊是名村）
【イベント概要】伊是名島の人々は、昔から誰に対しても人情味を持っておもてなすという精神があります。この大会はその精神を活かしたイベントで、高い参加者リピート率を誇る長寿イベントとなっています。　（写真提供：オールスポーツコミュニティ）

平成26年度地方創生フォーラム

森から始める地域の再生
～C・W・ニコル氏が基調講演～

第19回ふるさとイベント大賞表彰式に続き、同会場で平成26年度地方創生フォーラムが開催された（平成25年度までは「地域再生実践フォーラム」として開催）。

地域活性化センターでは、地方創生を担う人材の育成を目的として、地域づくりの方法について様々な視点から考える「地域再生実践塾」を平成26年度、全国6カ所で開催した。地方創生フォーラムはその総括として、地方創生に不可欠な森林の再生と移住の推進について、基調講演及びパネルディスカッションを行った。



基調講演するC. W. ニコル氏

日本でも森林の再生は可能
大事なのは「愛情と汗と知恵」

はじめに、作家で一般財団法人C・W・ニコル・アファンの森財団理事長のC・W・ニコル氏が「森から始める地域の再生」と題して基調講演を行った。

ニコル氏はまず、日本の樹木の種類の多さ、熊が生きていけるほどの豊かで生物多様性にあふれた森林に大変驚いたことや、田舎で「きょうは何もない」と言いながら出された料理が大変美味しかったことを話した。これらのエピソードから、日本の森林資源は豊かであり、また地域の文化や伝統が貴重なものであるということを説いた。

続いて、ニコル氏は自らが日本の森林再生に取り組むようになったきっかけや現在の事業について語った。ニコル氏は長野県の荒れ果てた森林を自ら購入して再生させる活動を行っており、故郷の英国ウェールズの森林再生の成功に触れ、「愛情と汗と知恵」があれば、日本でも森林の再生は可能だと気づいたという。続いて、ニコル氏が再生に取り組む長野県の「アファンの森」の様子を動画で紹介するとともに、豊かな森林が生み出す恵みについて話した。ニコル氏はここで、ただ森林を放置することと保護することは全く違うと強調するとともに、間伐材を活用した取り組み等を紹介した。

森林のもたらす恵みを大切に

さらに、67名の大人に3時間森林の中で過ごしてもらっただけで、健康状態が改善し、その効果が10日間も続いたというエピソードを紹介し、森林の持つ癒し効果を説明した。また、虐待を受けた子どもたちの笑顔を取り戻すためにニコル氏が取り組む「アファン5センスプロジェクト」を紹介した。

この後、ニコル氏は東日本大震災の復興支援活動を紹介。宮城県東松島市の人々をアファンの森に招いたことがきっかけで、小学校の再建と森林再生を支援することとなったという。現在、子どもから大人まで、あらゆる人たちと「どんなまちにしたいか」話し合いながら、作業を進めているといい、「被災地のことを決して忘れてはならない」と強調した。

最後にニコル氏は、日本国内で30万頭の鹿が処分されながら、わずかしか活用されていない事実を挙げ、「日本は資源の無駄遣いをしている、人々はもっと森林に目を向け、健康的な森林がもたらす恵みを大切にしなければならない」とした。また、環境を改善することで真の経済が生まれると語り、「地方に移住する若者が増えてきたことに希望を感じている」と結んだ。

パネルディスカッション
「田園回帰が地方を救う」

基調講演に続き、「田園回帰が地方を救う」と題したパネルディスカッションを行った。

コーディネーターにジャーナリス

トの松本克夫（よしお）氏、パネリストに半農半X研究所代表の塩見直紀氏、福井県池田町長の杉本博文氏、学習院女子大学教授の荘林幹太郎氏、サイファー・テック㈱代表取締役の吉田基晴氏が登壇した。田園回帰を大きな流れにするにはどうすればいいのか、移住者から選ばれる地域になるためにはどうすればいいのかをテーマにパネリストが意見を交換した。

まず、松本氏がパネルディスカッションの趣旨について解説。移住者数や移住相談件数等の増加を示す具体的データから、田園回帰の志向や動きがかなり高まっているとした。

続いて、各パネリストが自身の取組み内容を紹介した。塩見氏は「半農半X」というコンセプトを紹介するとともに、半農半Xと社会起業家がクロスした「半農半社会起業家」が生まれるまちづくりを目指していると語った。一方、農村の課題は情報発信や、いかに高い理念を掲げられるかであるとして、重要なことはインスパイアとリスペクトであるとした。



パネルディスカッションの模様

杉本氏は、自身が町長を務める池田町の取り組みを紹介しつつ、人口減少に歯止めがかかっていない状況を分析し、都市の便利さや刺激に対して、農村で暮らす価値が追い付いていないからであるとした。農村はその魅力を損なうことがないよう気を付けながらも変わらなければならないとして、「地域の価値を理解し磨いていかなければ、田園回帰の動きは消滅してしまうのではないかと危惧している」と語った。



コーディネーターの松本氏

地方創生 本質は都市と地方の支え合い

荘林氏は、農村の価値は多面的機能や食糧安保だけなのか、農業保護政策が農村をそのような価値しかない手段とみなしていいのかと厳しく指摘した。そして、農業保護政策が真に農村の多面的機能を守るためのものとなることで、地域で活動している人々の取り組みが開花するとした。また、個人の努力に行政が過度に依存しているとし、そのような個人の活動を支える行政の役割を議論することが、田園回帰を議論する際の根本であるべきだと語った。

吉田氏は、なぜ自ら経営する企業の本社を徳島県美波町に移転したのか説明するとともに、地方創生の本質は地方と都市の課題の交換、支え合いであると説いた。また、都会と比べて地方には、存在しないサービスや消えてしまったサービスが多いため、それらをスモールビジネスとして成立させる余地があると語った。



意見交換するパネリスト

また、自身が移住者でもある吉田氏は、よそ者が地域に馴染んでいくプロセスに大事なものは趣味や遊びではないかとし、それらを通じた方が地域に溶け込みやすい、と語った。

最後に松本氏は、数合わせの思考ではなく、新しいライフスタイルが生まれ、想像力が刺激され、分かれていた都会と地方が融合して何かが起きるということが、田園回帰の本質であると総括した。

首長の思い
column

世界遺産を地域から世界へ



和歌山県田辺市長　真砂充敏

本州の中心部にあり、太平洋に臨む日本最大の半島である紀伊半島、その南西部に位置する和歌山県田辺市は近畿地方で最も広い市域を有しています。この地には、神話の時代から神々の宿る特別な場所とされた深い森林が覆う紀伊山地が広がり、神道・仏教・修験道など様々な信仰が育まれてきました。そして、人々が癒しと蘇りを求めて歩いた参詣道が形づくられ、「自然と人間の営みによって形成された文化的景観」が誕生し、２００４年には三重県・奈良県・和歌山県にまたがる世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」としてその価値が認められることとなりました。

田辺市では、この世界遺産である参詣道「熊野古道」をはじめ、温泉等の豊かな地域資源を生かした、質の高い持続可能な観光地づくりを目指し、一般社団法人田辺市熊野ツーリズムビューローを立ち上げ、これまで国内外に向けた情報発信や受け入れ地としてのレベルアップに取り組むとともに、国内のみならず海外からのお客様にも対応できるよう着地型旅行業にも力を入れてまいりました。その結果、当地を訪れる外国人観光客数は年々増加傾向にあり、着実に海外で「Sacred Kumano」が認知されていることを実感いたします。

また、世界遺産登録からちょうど10年を迎えた昨年には、日本スペイン交流４００周年記念の年でもあったことから、熊野古道を含め世界で2例しかない数百キロにも及ぶ「巡礼道の世界遺産」のうち、もうひとつのそれを有するスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ市と、「巡礼文化の世界発信」と「持続可能な観光地づくり」を柱とした観光交流協定を締結し、観光共同プロモーションや共通巡礼手帳の作製などに取り組んでいます。この共通巡礼手帳については、押印帳の役割と共に、それぞれの道を踏破した証明書代わりにもなっており、取り組みを開始したその月には早速アメリカからのお客様が両市合わせて６３０キロ以上の道のりを巡礼したとして「二つの道の巡礼者」第1号に認定されました。

その一方で、地域に住む私たち自身がその価値を認識し、伝えていく取り組みも行われております。そのひとつである「語り部ジュニア」は、校区に熊野古道がある18の小中学校の児童・生徒たちが熊野古道の語り部活動を行うというもので、子どもたちはまず熊野古道の歴史や文化を調べて知ることから始め、次にそれを地域の人や地域を訪れた方に伝えます。この取り組みは熊野古道が世界遺産登録された翌年に、本宮町内のある小学校の校長が総合的な学習の一環として児童に熊野古道を学ばせ、「語り部ジュニアを育てたい」と、当時から活躍されていた地元の語り部団体にお願いしたことがきっかけで始まったものです。子どもたちの知識の蓄積はもとより、物事を相手にわかりやすく伝えることで表現力も磨かれ、失敗を重ねながらも経験を積み、良い反応があった時には理解してもらえたという達成感と共に、自分たちの住む地域を誇りに思う愛郷心が醸成されるのではないかと思われ、子どもたちの今後の活躍が期待されます。

蟻が列をなして歩くようだったことから「蟻の熊野詣」と呼ばれるほど、いにしえより数多くの人々が願いを込めて歩き親しんだ熊野古道が、世界遺産という世界の宝物ともなった現代、この地域に暮らす私たちはこれまでも先人たちがそうしてきたように「おもてなし」の心でお客様を受け入れ、気持ちよく滞在していただくことを心がけるとともに、地域の宝物としてもその価値を伝え後世に守り継いでいく役目を任されております。文化的景観に価値があると評価されたことからも、これからも暮らしの中の一部として大切にし、より多くの方々に訪れ体感していただけるよう世界に向けてもさらに発信し続けてまいります。



都道府県漫遊 POSTER GALLERY

富山県

手前みそですが…

山形県

米沢市 195



■松が岬公園　毎年、桜のライトアップが行われ、公園内には上杉謙信を祀る上杉神社がある

米沢市は、山形県の母なる川「最上川」の源である吾妻連峰などに囲まれた盆地で、山形県の一番南の玄関口に位置します。

米沢藩は戦国の名将・上杉謙信を家祖とし、初代藩主・上杉景勝、その家臣の智将・直江兼続やかぶき者・前田慶次、藩政改革を行った上杉鷹山などにゆかりのある「上杉の城下町」でもあります。春は満開の桜の中で「米沢上杉まつり」、夏は小野川温泉で行われる「小野川温泉ほたるまつり」、秋はきれいな紅葉トレッキングと「なせばなる秋まつり」、冬は幻想的な「上杉雪灯篭まつり」と上質のパウダースノーの中でのスキーなど、四季折々の自然をまつりと共に楽しむことができます。

そんな歴史や豊かな自然があるからこそ生まれる名産品として、日本三大和牛のひとつ・米沢牛をはじめ、米沢鯉、舘山りんごや米沢らーめんなどのご当地グルメがたくさんあります。

ぜひ米沢を訪れて、その魅力を肌で感じてみてください。



■田んぼアート　小野川温泉付近の水田を舞台に、米沢ゆかりの人物が描かれる。田植え・稲刈り体験も行われる



■米沢上杉まつり　毎年４月29日から５月３日まで開催される。「川中島合戦」が最大の見どころ



■上杉鷹山像　「なせばなる」の精神で藩政改革を行った名君。鷹山が築いた礎が米沢の今をつくっている



■米沢牛　置賜地方の気候風土に加え、先人が永い年月をかけて培ってきた飼育技術によりおいしい米沢牛が育てられている



■西吾妻山　日本百名山の一つで、数多くの高山植物がみられる



■姥湯温泉の露天風呂　米沢八湯の一つ。市内には８つの温泉があり、「米沢八湯」として親しまれている



■米沢らーめん　細打ち縮れ麺とあっさりした醤油味のスープが特徴のご当地グルメ

平成 27 年度第 1 回地方創生実践塾開催のお知らせ

宮崎県綾町「ユネスコエコパークを活かした持続可能なまちづくり」

主任講師：石田　達也氏（綾町エコパーク推進室　エコパークまちづくり推進監）
日　　程：平成 27 年 6 月 24 日（水）～ 26 日（金）
会　　場：綾てるはの森の宿（研修・宿泊施設併設）

開催趣旨

高度経済成長期以降、木材需要の増加で日本国内の多くの天然林が伐採により失われました。また、生産性を重視した農業方式への転換により土壌の本来の豊かさを活かした農業は衰退しました。しかし、日本社会が成熟期を迎えた後、改めて自然保護や有機農業の重要性が認識されてからも久しく時がたちます。

綾町では各地で天然樹林が伐採されていた時代にいち早く森林保護に取り組み、日本有数の自然本来の生態系を残す照葉樹林を守るとともに、基幹産業となる農業についても資源循環による豊かな土づくりを町全体で推奨し、全国から評価される町名を冠した「綾ブランド」を確立しています。

今回、綾町のエコパーク認定に至る取り組みや綾ブランドの確立への取り組み事例を通じて、自然と共生し、その豊かな恵みを享受して地域を活性化させるプロセスを学び検討していただきたいと思います。

開催地概要

綾町（人口 7311 人：27 年 2 月現在）は、宮崎県のほぼ中央に位置し、面積の約 80% が森林で占められています。国内有数の照葉樹林帯を有し、昭和 57 年に九州中央山地国定公園に指定され、“自然生態系を生かし育てる町にしよう”という町憲章のもと自然と共生するまちづくりを実践しています。

綾町では、長年町を挙げて有機農業に取り組み、昭和 63 年に全国初となる「自然生態系農業条例」を制定し、有機農産物、畜産物、手作りの工芸品など綾ブランドを確立しています。

また、平成 24 年には国内で 32 年ぶりとなるユネスコエコパークの認定を受けたほか、近年では綾ブランドの特典があるふるさと納税（平成 26 年度は約 10 億円の見込み）が好評で、全国的に注目されています。



綾町の大吊橋と照葉樹林・山桜（５月）

実践塾のカリキュラム詳細やお申し込み方法については、地域活性化センター HP でご確認ください。
お問い合わせは地域支援課（03-5202-6136）へ。

広報室、編集室を開設

今年、創設30年を迎えた地域活性化センターに4月1日から新たに広報室と編集室が誕生しました。

広報室は、センターが今まで蓄積してきた地域活性化情報を広く社会に活用していただくために自治体やメディア等へのＰＲを行い、国内外に向けて地域情報の発信をより一層強化いたします。また、地域のプロモーション支援にも力を入れることにし、具体的には自治体アンテナショップの支援、日本橋・ふるさと情報コーナー（自治体パンフレットコーナー）の運営、自治体のＰＲ活動の支援、国内外の視察・研修の受け入れなどを行います。

編集室では、地域づくりに関する情報の調査や収集、分析のために体制を整え、関係機関や学識経験者とのネットワークを強化し、情報誌「地域づくり」の充実を目指します。

いよいよ、国の地方創生事業も本格化してきました。関係者の皆様には、新設された2室も含め、センターのあらゆる事業をご活用いただければ幸いです。

地域づくり４月号

2015 年 4 月 1 日発行　編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター
東京都中央区日本橋 2-3-4 日本橋プラザビル 13 階 電話 03-5202-6131（代）http://www.jcrd.jp/　印刷・製本／株式会社太平印刷社

法律で許可された場合以外に本誌からの無断転載を禁止します
落丁・乱丁はお取り替えします。地域づくり情報課（03-5202-6138）まで、ご連絡下さい。

地域づくり4月号（通巻310号）特集　青少年の芸術文化活動の拠点づくり
平成27年4月1日　一般財団法人　地域活性化センター発行



宝くじは、図書館や動物園、
学校や公園の整備をはじめ、少子高齢化対策や
災害に強い街づくりまで、いろいろなかたちで、
みなさまの暮らしに役立てられています。

一般財団法人 日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や
公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。

一般財団法人
日本宝くじ協会
http://jla-takarakuji.or.jp/